
勇者Lv 1

佐藤コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者Lv1

【Nコード】

N8070L

【作者名】

佐藤コウ

【あらすじ】

かつて魔王との激しい戦いがあった。あまたの勇者たちが彼に挑み多大なる被害を出しつつも勝利をおさめる事に成功したのだ。各国首脳は再び来襲するであろう魔王に対抗する為にある制度を制定した。これが『公認勇者制度』である。主人公、勇者アークはニートである。与えられた特権を使いただらと怠惰な日々を送っていた。しかし、そんな彼にも旅立つ時が来たのだ。背に腹は代えられないって奴だ。

第一話 『冒険したら負けかな。とも言っていられなくなってきた』 (前書き)

横用の改行はしていないので、よろしかったら縦でお読みください。

第一話 『冒険したら負けかな。とも言っていられなくなってきた』

第一話 『冒険したら負けかな』とも言っていられなくなってきた』

「勇者アークさん」

受付嬢が俺の声を呼んでいた。エプロンドレスを来た小柄で可愛い子であったが俺は特にドキドキする事なくカウンターへと向かって行った。

「では、これから頑張ってくださいね」

彼女が差し出した『手帳』を俺は覇気なく頭を掻きながら受け取った。彼女は微笑みの変わりに、ややニヤケながら俺にそう言うのと退室していったのである。

『勇者更新所』とのプレートのあるこの部屋にはもう俺しかいなかった。部屋に備え付けてある木製のベンチに力なく座ると天を仰ぎ見る。『手帳』を本来は確認するべきなのであるが、それは気が進まなかった。だから、天を仰ぎ見る。実際は木張りの天井しか見えない訳であったがそんな事は今の俺にはどうでもよかった。ここは城の隅っこにある俺達勇者専用の部屋だった。

勇者と呼ばれる人間は実の所少なくともはない。競争率は実に百倍を超える超人気職であるのは事実だったが半年に一度、各国で行われている『国定勇者検定』に合格すれば誰でも『職業勇者』となる事が出来るのだから、それなりの数は存在するのだ。

顔は動かさずに視線だけ『手帳』に向ける。これは『公認勇者手帳』と、呼ばれるもので勇者のみに渡される大変名誉ある手帳なのだ。ちなみに、余りにお役所的なその名称がダサイと俺達勇者達はそれを『冒険の書』と、呼ぶようにするのが通例であった。

最初の数ページに渡り勇者の心得や特典などが書かれていて、どういう魔法かは解らないが、その次に俺のプロフィールの欄があり

覚えた魔法やスキル、倒したモンスター等 更に冒険の成果を数値化したもの 通称『経験値』 が自動で記入されていくのだ。そして、最後のページには五段階で評価される勇者評価と備考欄があったりするのだ。どれ、参考までに俺のを見せてみようじゃないか。誰にともなく小さな声でそう言つと、俺は『冒険の書』の最後のページを開いた。

勇者評価：1

備考：次回査定までに評価を3以上にしない場合、勇者の資格を剥奪します。

やっぱりな。

当り前の話であつた。だから、俺はこの部屋に入ってからというもの、力なくと言うか、やる気なくと言うか……。とにかく、憂鬱な気分なのであつた。

この評価は不当なものではない。俺はそれを自覚していた。そもそも『冒険の書』は嘘を記入しない。だから不正などありえないのだ。

『職業勇者』となつて一年。俺の手帳は最後のページ意外一切更新されていないのだ。だから、この評価は仕方のないことだつた。要するに俺はこの一年、モンスターと戦う処か町の外にすら出ていないのだ。

国策とは言え、実際にゴールド（この世界の通貨）が動いているのだから、働かない勇者など必要などない。世知辛い世の中だぜ。なんて思いながらも、それが解らない程、俺は子供ではなかつた。

『冒険したら負けかな』なんて言っていたらなくなつたな……。

こんな事を思いながら俺は部屋を出ていったのであつた。

話は一年とちょっと前に戻る。

当時の俺は『トアル村』と言う場所に両親と共に住んでいて、成人を迎える一五歳まで後数日と云った頃合いだった。

その年頃の少年というものは畑仕事を手伝ったり、親方について何らかの技能の取得に精を出しているもののだが、俺は家に引きこもってマンガを読んだり、気が向くと外に出て悪友たちと悪ふざけをする、と言った所謂放蕩息子を地で行く存在であった。一言で言ってしまうえば俺は二トトである。

何故、そんな事が許されていたか、と言うと実は俺の今は亡き爺様が五十数年前に大魔王を倒した伝説の勇者様であって、その為に俺の一家は村の尊敬を一身に集める存在だったからである。

それに加え両親から仕事を覚える様に言われる度に『俺は爺様の様な立派な勇者になる』なんてほざいてたものだから、両親としては俺にそんな気が更々ない事は感じていても納得せざるを得ない状況となっていたのだ。

しかし、今思うと、これが失敗だったのだ。引きこもるための他の理由を考えていればこんな事にはならなかったのだ。

その日の俺はガタンゴトンという妙な振動で目を覚ました。

ここはどこだ？

頭が混乱する。俺は確かにベッドで寝ていたはずだ。それなのに俺の視界から見える物は布製のホロであり、背中から伝わってくる感触は板張りのそれだった。何故か馬車に揺られている事に気が付くまでしばらくの時間が必要となったのだ。

そう、俺はいつの間にかやら馬車に乗せられていたのだ。目を擦りながら御者台に頭を出す。すると、親父さまが上機嫌でこんな事を

言い出すのだ。

「よお、アーク。よく眠れたかい？」

ニヤニヤしながら俺の方に視線を向ける親父さまを見て、ようやく俺は事情を察するにいたったのだ。その言葉に対して俺は何も返せない。ただ、ただ、苦虫を噛み潰したような顔をするのみであった。

「いやあな、お前は勇者になるんだったよな？ お前も後少しで成人になるわけだ。そこで丁度いい機会だから町に連れて行こうと思っただけだ。」

やはりそうだ！ 親父さまの表情からそんな事ではないかと思いついたんだ。『勇者になる』なんて俺の言葉は当然、両親としては信じていなくて、単にニートライフを満喫するための方便でしかない事は承知の上だったって訳だ。

もちろん、そんな事は俺としても解っていた事だが、まさかここまでやるとは思っていなかった。簡単に言っしまえば俺の方便を利用して家から追い出される形となってしまうのだ！

「……親父さまや……」

「いやあ、流石俺とカーさんの息子だな。立派な勇者になって人様の役に立ってくれよ」

「いや、だから……」

「爺さんも草葉の陰でさぞや感涙にむせび泣いている事だろうよ！
ワッハッハッハ」

……だめだ。寝起きで頭が回ってない事もあり上手い言い訳が思いつかない。

荷台に戻り思案にふける。そして、何度か親父さまに引き返すように説得をしたが、その度に先の調子で完全に無視されてしまった。確かに俺は伝説の勇者の孫で親父も結婚するまでは勇者業をしていたらしい。故に村人からは俺も期待されていて多少のヤンチャは目をつむってくれた。そう、俺は特別待遇で生活を送って来たのだ。しかし、特別待遇というものには見返り と、言うか義務の様

な物が生じるようであった。要するに、お前も勇者になれって事だ。だが、俺にはそんな気は更々なく、爺様が世界を救ったのであれば孫の俺の代ぐらいまでは敬われるべき。こんな事を漠然と考えていて何の努力もせずに日々をただ怠惰に過ごしていたのだ。

世間体と云うものの存在ぐらいは知っていた。両親が俺の奔放さに芳しくない感情を抱いていたのも知っていた。だからって、心の準備も出来ない俺を本人の意思を無視して追い出すなんてひどいっつてもんだぜ！

「じゃあ、がんばってくれよ。我が息子よ！」

こんな俺にとっては捨て台詞に等しい言葉を残して親父さまと馬車が俺を置いて戻っていく。『ハジメノ王国』の首都にある『ハジメノ城』の城門にての出来事であった。

そんな薄情な馬車に力なく手を振ると俺はこれまた力なく城門を見据えて肩を落とすのであった。城門には二人程兵士がいて、その内の一人が俺の方にゆっくりと向かって来るのである。

何故かと言うと、俺を逃がさない為に親父さまが帰り際に兵士に俺が何者であるか、そして、何故ここにいるかを説明していたからだ。

兵士に案内されて王の間まで案内される。そこには数名の兵士と玉座に王様と思しき、恰幅のいいおっさんが座っていた。

「おお、そなたが大勇者アレフの孫か！ 本来であれば試験を受けなくてはいけないのだが、そなたには特別に公認勇者の資格を与えよう」

「……はあ」

そのおっさんが勝手な事をのたまう。どうやら俺は特別な存在らしい。確かに試験の時期は過ぎていたし、次回の検定まではまだ二カ月ぐらいある。無情にもそれまで待てなんて言われたら無一文の俺としては堪ったものではない。

「それでは、そなたの活躍を期待しているぞ」
このおっさんの言葉は何と言うかそっけない気がした。王様と言えども、お役所仕事と言うものはこうなのだろうか？ それだけ言う横に控えていた兵士に何やら指示して、そいつが俺にリュックサックを『支給品だ』と、手渡して謁見は終わりであった。

え！？ これだけか？

あつけない謁見もそうであるが支給品がリュックサック一つとはどういう事なのだろうか？ 口だけでなる気など更々なかったとは言っても身内が身内だけに勇者と言うものに憧れの様なものがあったのは事実だ。その勇者を旅出させようとするのにリュックサック一つだけとは、ピクニクじゃねえんだよ！ こんな事を思いつつも、城から出るまで口に出せない自分にも困りものである。

半ば呆然としながら街中を歩く。無一文で頼れる人が誰もいない町。思わず涙が出そうになるのを感じた。やがて噴水のある公園に辿り着く。ここに住みつけばホームレス生活とは言え水に困る事はなさそうだった。ベンチに力なく座り何気なくリュックサックに視線を向ける。今の俺にはこれが生命線だったのだ。

カバンの重さと膨らみから見て大した物は入っていないだろう。こんな事を考えつつも、仕方がないので中を確かめてみる事にした。ガサゴソと中に手を入れてみた。

何も入っていないかった。

ふざけんな！ と、思い逆さにしてみた。

中からパタ、ガシャ、チャリン、と、言う擬音と共に、それぞれ手帳、剣、『100G』と書かれた小袋が落ちてきた。

はて？ 不思議な事もあるものだ、と思いながら小袋の口を開けてみた。ゴールドが入っている。数を数えてみるときっちり百枚。取り出すたびに数字が減っていた処を見ると、どうやら中身と数値は連動しているようである。ちなみに日本円に直すと1ゴールドは

約100円である。つまりは一万円で命を掛けろっていう訳だ。職業勇者は公務員の様なものとはいえ、ありえない。

次に剣を抜いてみた。俺は武器商人ではないので目利きなどできないが、悲しい事にそれでも安物だと解ってしまうぐらいの品であった。恐らくは皮膚の固いモンスターなんかをこれで殴ったら折れてしまうだろう。ふざけんな。

最後に『公認勇者手帳』と書かれた手帳を捲ってみた。最初のページには勇者の心得の様な物が書いてあった。『困っている人を助けましょう』などそれっぽい事が書いてある訳だが心得の最後に印で『他人の家のタンス等を許可なく漁る事は犯罪です』などと書かれているのは何故だろう？

ページを捲ってみた。すると、俺の目は輝いたのだ。そこには勇者の特典について書かれていた。だから、俺の目は爛々と輝いたのだ。『勇者一行は街中での帯剣が許されている』、『勇者一行は無審査で国境を越える事ができる』『こんな事はどうでもよかった。俺の目を輝かせたのはこの項目。つまりは『勇者一行は公共の施設、及び国指定の酒場（この世界の酒場は宿屋を兼ねる）を無料で利用できる』の項だ！

「ひゃっほう！」

思わず声に出して喜んでしまった。公園にいた人たちが変な人を見る目で俺を見ていたが、そんな事は問題にならなかった。

確かにそうだ。俺はゴメンだが勇者と言うものは無償で困っている人を助けるなんて事がよくあるらしい。無収入じゃあ生活できないって話だ。だから、こんな特典がある。即ち俺は衣食住の内、食住は保障されている訳なんだ！

小躍りしながら酒場に向かっていく。店に入ると俺は胸を張ってウェイトレスと思いき少女 名をエリザと言う に手帳を見せた。すると彼女は尊敬の眼差しで俺を見てにこやかに俺を部屋まで案内してくれた。

簡素ではあるが清潔な部屋。そのベッドにダイブしてクックッ

クツといやらしい笑いを洩らしてしまう。

俺は勇者だ。彼女の反応から見て勇者とはそれだけで人の尊敬を集める存在のようだ。ここには口うるさい両親もいなければ冷たい目で見える村人もいない。大きな図書館もあるようなので退屈しなくても済む。憂鬱な気分から一転、この時の俺は実に健やかな気分であった。

冒険したら負けかな。

こんな事を当時の俺は考えていたのだ。

こうして俺は新たな二トライフを満喫していった。

そして、時は今に戻る。

「お帰りなさい、勇者アーク様」

酒場に戻るとエリザが皮肉たつぷりに俺を様付けで出迎えてくれた。一年前の尊敬の眼差しはどこ吹く風で今はまるで汚物を見るような眼で軽く一瞥しただけでカウンターへと戻っていく。

まあ、当り前の話だわな。そんな自嘲を浮かべ俺はカウンター横に並べてあるコップを手に取り水を汲んで隅っここの席に座る。ドリンク類は有料だった。だから俺は水を飲む。ゴールドを入れる小袋は当の昔に0を表示していたからだ。

エリザはこの酒場のマスターの娘だった。幼いころから、ここで多くの勇者たちの武勇伝を聞かされて育ったのだ。故に勇者つてものに昔から憧れをもっているのだろう。だから、彼女の俺に対する態度は至極、当たり前前の話なのだ。

水をちびちびと舐めつつ、これからの方針を考えてみる。

今回の査定は約三ヶ月後。この間に勇者評価3を得るための『経験値』を稼がなくてはならない。道は二つあった。残り三ヶ月の二トライフを満喫するか、真面目に冒険をするか、だ。

これまでヌルヌルの生活を送って来た俺としては前者を提案した

かったが、勇者の資格を失った俺にその後の生活が送れるのだろうか？ 最悪、村に戻り両親を頼るといふ手もあったが恐らく、その場合両親は俺の目の前で俺の葬式を挙げて泣いてくれることだろう。よって、考える余地もなく後者を選択せざるを得ないのだ。すると、まずは仲間を集めなくてはならない。中には一人旅をする猛者もいるようだが戦闘経験のない俺にとってはそれは自殺行為に過ぎない。

「なあ、エリザ。『仲間申請』を行いたいんだが？」

俺は心を決めてコップの中身を一気に飲みするとカウンターへ行き、こつエリザに尋ねたのだった。

「え？ ……えーと、じゃあ、ちよつと待っててね」

俺の発言が心底意外だったのだろう。エリザは軽く驚いた表情をして、ゆっくりと俺の頭から下へ視線を移すと何やら書類をガサゴソとした。

そう、こつという酒場と言うものは冒険者を募集する場でもあるのだ。勇者達はここで『仲間申請』を行い、仲間をあつめる。

「じゃあ、この紙に希望の職業と性別を書いてね」

彼女から渡された紙を手に取り思案にふける。申請用紙には三分の記入欄があった。一般のパーティーは人数制限などないのだが、勇者ご一行ともなると話は変わる。パーティーメンバーは勇者の特典の殆どを受け取れるので色々と決まりがあるのだ。その一つが人数制限である。伝説の勇者たる爺様のパーティーが四人であった事にあやかり、勇者のパーティーは四名までという決まりがあった。

エリザがちよつと嬉しそうな顔で膝を着いてこつちの方を見ていた。まるでダメな息子がようやく働く気になった時の母親の様な目をしやがって……。畜生め！

用紙に視線を戻し構成を考えてみた。まず、俺は戦力にならないと、言つより俺を守ってもらえる編成がいい。すると、壁役の戦士二名に回復役の僧侶一名がよさそうだ。しかし、世の中には物理攻撃が効きずらいモンスターもいると聞く。戦士を一人削つて魔法使

いを入れるって手も捨てがたい。うーむ、どっちも選びがたいな。

「まだ、決まらないの？」

別の客の接客を済ませた彼女が後ろから覗きこんで、そう言った。

「……うーむ」

そんな事を言われても俺としては命に係わる問題だ。安易に決める訳にもいかないのだ。それを彼女は理解してくれないようだ。彼女とのこんなやり取りを数回繰り返した後、まだ決められない俺は「今日一日考える！」とだけ告げて部屋に戻った。

俺はベッドに寝転び紙を睨みつけながら思案を続けた。

結局、俺が出した結論はこれだった。

「えっとね……。これ何の用紙か解ってる？」

翌日、提出した用紙を見てエリザが引きつったような顔で俺に言った。

そこには『おっぱいの大きい美少女戦士』×2、『おっぱいの大きい美少女僧侶』と書かれている。通常時の安全を優先した結果だった。

「希望を書く欄なんだから別にいいだろ」

彼女のリアクションは予想済みであったが、これから旅をする仲間なんだ。むさい男となんかと一緒に旅できるかってーの。

「いやね、そうじゃなくて、性別を限定するのは別に問題ないのよ。でもね、『お……胸が大きい』とか『美少女』とかまで限定するのは問題大ありなのよ」

おっぱい、と言いかけて少し顔を赤くしながら訂正する、彼女。ふふふ、可愛い奴め。俺がそんな彼女の表情を見てニヤニヤしていると益々、顔を赤らめて一度そっぽを向いた後、俺の方を睨んでから続ける。

「……まあ、いいわ。女性の戦士と僧侶をご所望なわけね」

「そうそう」

「登録帳で確認するから、ちょっと待っててね」

そう言ってから、やたらと分厚い本をめくっていく。この本は『冒険者登録書』と、呼ばれるもので勇者からスカウトを待つ者たちが登録していくという実に便利なものなのだ。

「いないわね」

数分後、エリザはそう宣告した。

「おっぱいの大きい娘はいなかったのか！」

彼女のその悲しい宣告に対して俺は大げさに天を仰ぐ。

「違うわよ！ そんな条件で検索なんてしていないわ」

そんな事は百も承知であったのだが彼女の反応が見たくて言っただけである。

「いい？ アークが希望している女性の戦士と僧侶で今、フリーな人がいないって意味よ」

「じゃあさ、どの職でもいいから女の子って条件で検索してくれよ」先に伸べた通り、俺にとっては性別が重要なのである。俺の言葉に彼女がジト目で睨んでいたがそんな事は知ったことではない。

「ねえ、アーク。キミの事を心配してあげる義理なんて、これっぽっちも無い訳なんだけど……。今、自分が何をしているか解って言うてるんだよね？」

こんな事を言いつつもエリザは面倒見がいい。彼女と知り合って約一年が経ち俺はその事をよく知っていた。所謂、ツンデレってやつなのかもしれないな。まあ、俺にデレた事などはただの一度もない訳なんだが……。

「キミは旅に出るために仲間を集めたいんだよね？ って、ことはね、おつかないモンスターや危険なダンジョンなんか遭遇するわけ。もしかすると死んじゃうかもしれないんだよ？ そんないい加減な決め方しちゃっていいの？」

あー、うぜえ。しかし、俺には勇者固有スキル『一途な心』（効果：悪の誘惑に打ち勝つために勇者に備わった自分の正義を貫き通す心。他人の説教なんてへっちゃらだぞ！）があるので彼女の説教を全力で受け流せるのだ。

こういう時の彼女は俺の母親にでもなったつもりなのだろうか？
質問のような口調の癖に俺が一言でも反論しようものなら「アークは何も解ってない！」の一言で俺の言を封じるのである。よって俺としては聞き流すしかないのだ。

「いいわ。私が選んであげる」

しばらく説教が続いた後、それに満足したのかエリザが嬉々とした表情でそんな事をほざきやがる。

終いにはこうなってしまうのだ。これに対して俺は「俺の希望は無視なのかよ！」とか「それじゃあ、申請用紙とかいう設定が無意味だろ」なんて事は言わない。言っても無駄だと知っているからだ。

「……んー、こんなもんかな」

どうやら選び終わったらしく、彼女は数枚の紙の端を合わせるようにテーブルでトントンとすると俺にそれを手渡し、俺はしぶしぶと受け取るのだ。

「えっと……。解ってるとは思うけど、ブッチしようなんて思わないことね。後で確認するし、した事がバレたら 解ってるよね？」
そして、こんな風になにこやかではあるが感情のない笑顔で俺を脅すのだ。

これ以上ここにおいても催促の説教をされるだけだったので、やはり、しぶしぶとはあるが俺は頭を掻きながら酒場を後にしたのだ。

「お前さんの仲間？ ハンツ、冗談じゃないね」

七人目に、こう断られた後、俺は公園のベンチでがっくりとうなだれるのだった。

この町は王都とはいえ、人口が一人にも満たない規模の都市である。別段、この町の人口が少ないって訳ではなく、全体としてみれば人口は多い方で単純にこの世界の都市の規模ってのが、この程度ってだけの話だ。

俺が何を言いたいか、と言うと……。一年も住めば名前は知らな

くとも町の住人とは最低でも一度は見かけた事があるって関係な訳で……。こと、冒険者同士ともなると　それも俺が勇者であるとなると……。俺がどんな奴かって風評ぐらいは広まっている、と言うか……。そんな奴に命を預けられないと言うか……。とにかく、その悉くに断られた訳なのである。

エリザも半分には断られる事を予想していたのだろう。募集は三人なのに対して紹介は七人もあったのだ。しかし、流石にその全員に断られるのは予想外の事であろう。

流石、俺。ワツハツハツハ……ハア……。

全員に断られました。なんて報告する事は推薦してくれた彼女に對し実に心苦しくあり、また屈辱的な事である。だから、俺はベンチでうなだれているのだ。

報告すれば恐らくエリザは優しく慰めてくれるだろう。頭を優しく撫でながら励ましてくれるかもしれない。しかし、それは屈辱感を増すだけなのだ。こんな情けない俺だがプライドだけは人一倍だつて事なのだ。

いつその事、エリザを口説き落として酒場で働かせてもらうか？

なんか、もう勇者業を続ける事がどうでもよくなつてきて、こんなどうしようもない事を考え出した時それは起こつた。

俺の目の前にドサツと音を立てて少女が倒れたのだ。

それを精気のない眼で見つめる俺。何となく少女と断定してしまつたが恐らくは間違いないだろう。

赤い武道着に無地の白ズボン。おかつぱと言うにはやや長めの黒髪。前のめりに倒れている上にややダボついた服装の為、凹凸はよく確認できなかったが骨格は女性のそれであった。だから、間違いはないはずだ。

可哀想に……。

俺は彼女を見てまず漠然とこんな事を思った。やや頬がやつれていて焦点の定まっていけない精気のない目で俺の方を見ていたのだ。口が力なく動いていて俺に何かを訴えているようであったがそれは音にはならなかった。恐らくは「腹減った」、とか「食い物をくれ」みたいな事を言いたいのであろう。

可哀想に……。

俺は再び、こう思った。俺も鬼ではない。可能であればこの少女に何かを買い与えてやりたがったが先に述べたように俺は無一文である。行き倒れるなら俺以外の誰かの前で倒ればよかったのに……。この少女は運がない。三ヶ月後、同じ状況に置かれるかもしれない俺としては憐れむしか他に術がない。

俺は辺りを見回した。普段なら人通りがある公園なのであるが今日に限って誰もいない。だから俺の前だったのか、なんて無情な事に思いをはせる。

そんな目で見るなよ。

少女が向ける虚ろな視線に思う。俺だって助けたいのは山々なんだよ。

そう、これまで俺はこの哀れな少女に一切声を掛けていなかった。彼女は薄情者だと思っっているのかもしれない。確かに思われても仕方のない気もする。しかし、一度声を掛けてしまったら確実に巻き込まれる。問題解決能力のない俺が巻き込まれても解決などできるわけがないのだ。

俺以外の誰かに救われてくれ。見回りの衛兵でも見つけたら、ちやんとお前の事は報告しておいてやるよ。心からそう思った。思うだけなら無料だしな。

流石にこのまま留まるのも何かと思い、立ち上がる。そして、一度だけ彼女に視線を向けると胸のあたりで十字を描き、その場を後にしようとする、俺。

「うわあああ!？」

俺としては(そんなもん持っていないが)マントを翻して颯爽と去ったつもりであつたが、壮大にぶっこけた。何も無い平地で『ハワワワ』なんて言いながらこける特技は持っていない。この少女に足首を掴まれたから倒れたのだ。

おいおい、餓死しそうな状況なのに何て力なんだ!

「あううう……」

足首に手形が付きそうな位、まるで万力で固定するようにしっかりと掴みながら絞り出すような声を上げる彼女。そして、ゆっくりとゆっくりと匍匐前進で近づいてくるってか、俺を自分の方に引き寄せていく。彼女の虚ろな目。半開きのカサカサの唇。実にホラーな状況だった。

「止める! 放してくれ!? 俺には何も買ひ与えてやる事なんてできやしないんだ!」

そんな状況だから俺がこんな情けないセリフを吐く事になったとしてもしょうがないというものだ。

「せめて……。み、水を……」

「わ、わかった。落ち着いてくれ! 俺がどうにかしてやるから、まずは手を放してくれ!」

係わってしまった。自分の危機回避能力の低さに絶望した俺であった。

「で? どうして行き倒れてたんだ?」

俺の声など届いてないのだろう。酒場のカウンター席で片膝付きでそう尋ねる俺の横には一心不乱に定食(今夜の俺の夕飯)にがつく少女がいた。

係わってしまった以上はここに連れてくる以外に手段がなかった。あの後、取りあえず噴水に引きずっていき水をたらふく飲ませた後、仕方なく彼女に肩を貸し酒場に連れていった。そして、泣く泣くではあるがエリザに事情を話し、かなり早めの夕食を出してもらったのだ。

俺はダメな人間ではあるが一応、勇者でもある。今夜は空腹で眠れぬ夜を過ごす事となるかもしれないが彼女を餓死から救うためには仕方がない事なのだ。

「今時、行き倒れなんて珍しいわね。あー、そんなにがつつくと喉に詰るわよ」

こういうのはお約束のようで、何かを喉に詰まらせてゲホゲホやりだした少女の背を優しくさすってやるエリザ。少女の咳が治まるとコップにミルクを注いで渡してやる彼女。

「ん、ずるいぞ！ 俺には水しか出してくれないじゃないか」

「何せコイ事、言ってるのよ……」

少女の空になった皿に「サービスよ」なんて言いながら美味そうなパイを置いてやるのだ。コノヤロウ。夕飯を哀れな少女に譲ってやるなんて偉業をした勇者に対する態度とはずいぶんと差があるじゃないか……。

「もう一度、聞かず？ どうして行き倒れてたんだ？」

彼女がパイを食べ終わるのを確認してから俺。

彼女は幸福そうな顔をしながら自らの指を舐めた後、素早くイスから後方に跳び下りると正座をして床に両手を着いた。つまりは土下座をした。

「「え？」」予想外のリアクションに思わず素っ頓狂な声を上げる俺とエリザ。

「あなた達はボクの命の恩人です。美味しいゴハンありがとうございます」

少女は額を床に擦りつけながら俺たちに食事の礼をした。

「名乗るのが送れました。ボクの名前はイリアと言います。このこ

恩に報いるため何でもします。何でも申しつけてください！」

「いや……、そこまで感謝しなくても……」

「いえ、命を救ってもらった以上はそれに値するのはボクの命だけです。この場で死ぬ、と言うのなら腹を切ります！」

そんな事を言っただけで立ち上がると胴着の前垂を捲って腹を出し親指を柔らかくさすお腹に当たるとゆっくりと横に引くのだ。指が通った後に赤い線が付き軽く血が滲んでるように見えた。おい、しゃれになんねーぞ！

「ちょ、ちよつと！ アーク、止めなさいよ！」

エリザが慌てながら俺にそう催促する。仕方がないので俺はテールを拳でドンと叩き説得を始めたのだ。

「イリアと言ったな？」

「はい！」

「お前の覚悟は見せてもらった。しかし、俺達を馬鹿にしているのか？」

「そそそ、そんな事はありません！」

俺の問いに再び土下座をして否定するイリアを見降ろしながら話を続ける。

「いや、馬鹿にしているな。俺の救った命を簡単に捨てるなんて馬鹿にしているに決まってる。それでも『違う』とお前が言うのであればそんな事は二度としてはいけないぞ。わかったかい？」

「はい！」

「よし、じゃあ俺にお腹を見せてみる……イテッ」

「何どさくさまぎれに言ってるのよ！」

「ちげーよ、馬鹿！」

どうやら俺がイリアにエロい事をしようとしていると思ったのだろう。エリザにお盆で頭を叩かれたのだ。仮に俺にその気があったとしても流石に場所は選ぶってもんだ。

立ち上がり前垂れを捲ったイリアの腹に軽く手を当てる。俺の手が光り赤い線が徐々に消えていくのだ。

「暖かい力を感じます……」

イリアが潤んだ瞳でそう感想を漏らす。

「あんたって本当に勇者だったんだね……」

それを見たエリザはそんなふざけた感想を漏らした。

お前、俺を何だと思ってるんだよ……。いくら爺様のコネで資格を貰ったって言っても、むしろ爺様のコネだから貰えたんだよ！

ムキになって反論するのもかつこ悪いと思い、俺はニヤリと返してやるのだ。

剣も魔法も使えるスーパースター。それが勇者だ。

剣は使った事がないので適性は解らないが、恐らくそれなりにはあるはずだ。

俺は生まれつき二つ程、魔法が使える。と、言うか魔法とは先天的な才能で生まれつき使えない奴はどう努力しても使う事は出来ない。経験と努力で上がるのは魔法の威力や範囲、命中精度と言ったものだけなのだ。

その内の一つが回復魔法である。俺はまったく努力をした事がないので軽い怪我を、それも患部に触れるぐらい近づけないと治せない。だから、腹を出せと言ったのにこの女は……。ちなみに、もう一つはその内に戦闘で使う事があるだろうから今回は説明を省こう。「さて、イリアとやら。いい加減、何で行き倒れていたか話してもらおうか？」

三度目の質問である。流石にそろそろ話を進めたいものだ。

「はい！」

イリアは軍礼 胸の前でジャンケンのパーとグーを合わせてお辞儀をする をした後に話し始めた。

「ボクは国境近くの村に住んでいて、そこにあった父上の道場で修行をしていました。そして、先月父が亡くなり、父には借金があったように道場が借金取りに差し押さえられてしまったのです。ボクはこれまでの人生で武術の技を磨くことしかしていなかったのですが、生活能力がありません。無一文になったボクは困りました。ですから、

冒険者になって生活の糧を得ようと思いい王都に来たのですが町に着いたところで力尽きまして……」

妙にニコニコ顔でそう告げていく、イリア。中々へビーな人生を歩んで来たらしい。話を聞きながらエリザも目を潤ませて鼻を嚙っていた。つてか、突然沸いた父の借金つて詐欺られただけじゃねえのか……。

「そっか、お前も大変だったんだな……」

何となく聞くに堪えない不幸話に発展して行きそうだったので頭を撫でてやりながら俺は話に割り込んだ。

「ところで行く当てとかはあるのか？」

「いえ、ありません！」

これまたニコニコ顔で即答された。

仲間のいない俺と行く当てのないイリア。まあ……、しょうがないかな。

「ふむ。で、冒険者登録は済ませてあるのかい？」

「いえ、ありません！　　と言つかそれは何でしょうか？」

やはりな、と思った。何となくコイツ頭弱そうだし……。

「じゃあさ、エリザ。説明してやれよ」

「……グスツ。そうね……」

説明がめんどくさかったのでエリザに話を振った。彼女は一回強く鼻を嚙るとイリアにあれこれと説明をして登録用紙に記入をさせ始める。

冒険者登録が終わるとイリアが手の平ぐらいの大きさのカード

通称キャラクターカード　　を両手で持ち俺に差し出してくる。

そして、それに目を通すと俺は『冒険の書』にカードを挟むのだ。これでパーティー参加の契約が終わる。

「じゃあ、俺は勇者アークだ。よろしくな」

「はい、勇者さま！」

俺の簡単な自己紹介に満面の笑顔でそう返す、イリア。余りに正直な彼女の反応に照れてしまい、思わず指で鼻を掻く。

勇者様……か、中々いいじゃないか。

初めて肯定的な意味でそう呼ばれた気がした。そして自分の立場を今更ながら思い出す。

こうして一人目の仲間が集まったのだ。

「勇者さま、おまたせしましたー！」

現在、唯一のパーティメンバーである武道家イリアが公衆浴場の入口で大きな身振りで俺に手を振っていた。

あれから一週間が経った。勇者の一行に加わった彼女は勇者の特典である酒場無料を受けて俺の隣の部屋で生活をしている。

出会った当時、餓死寸前の痩せこけた状態であった彼女も今ではちゃんとした食事（とエリザの依怙贖肩）のおかげで今ではすっかりと健康を取り戻したようだ。ちなみに、公衆浴場も特権で無料利用できる。

カサカサだった肌もすっかりと年相応の艶やかさを取り戻し、輪郭も少女らしいふつくらとしたものとなった。服も洗濯をすすり、さりげなく綺麗な姿となると、あの時はまったくそうは思わなかったが可愛い顔をしている事に気づくのだ。まあ、胸がぺったんこなのが実に残念ではあるのだが。

そんな俺の感想をよそに彼女というものは元気はつらつで俺の座るベンチの横にこれまた元気よく座り、ニコニコ顔で串焼きをかじるのである。

ん？ 串焼き？

「な！？ 何でお前、串焼きなんて喰ってんだ？」

「勇者様も食べますか？」

いや、俺が言いたいのはそんな事ではない。ニコッと微笑んで串焼きを俺に差し出そうとする彼女を俺は片手で制する。

「いや、お前、無一文じゃなかったのか？」

「へへへっ、恥ずかしながらその通りでしたが、エリザさんがおこずかいをくれました」

照れたように頬を赤く染めて俺の質問に答える彼女。

あの、クソ女……。俺とはずいぶんと扱いが違っじゃねえか……。

上機嫌で串焼きをほうばり終わり指に着いたタレを幸せそうに舐めているイリアを眺める。別に羨ましかった訳ではない。彼女を見ながら後でエリザに文句でも言っつてやろうなんて思っていたのだ。

彼女は俺の視線に気が付くと行儀の悪いところを見られて気恥ずかしかつたのか照れ隠しにニコリとする。

「ところで勇者さま。冒険にはいつ出発するのですか？」

「んー、最低でも、もう一人は仲間が見つかってからかな……」

彼女にしてみれば当然の疑問だろう。しかし、俺にとつては最もされたくない質問だった訳で俺は前に向きなおすとそんな曖昧な答え方をした。

単騎で旅をする猛者もいるのだ。二人でも出発出来ない事はないだろう。俺は勇者として旅立つ。これは決定事項だ。しかし、それには二つほど問題があった。

一つは、俺に自信がない事。旅に出て困っている人を助けたりモンスターと戦う訳だ。イリアがどれくらいの強さかは知らないが登録上『武道家レベル』だ。

そう、冒険者のレベルというのは登録時に『1』とされる。そこから冒険者の評価の指針たる『経験値』を稼いでレベルが上がっていくのだ。よって、無登録の歴戦の猛者も俺みたいなド素人も登録時は『レベル』として扱われるようになっていた。

だから、もしかするとイリアが歴戦の『レベル』かもしれないとは言え、俺同様にド素人だった場合の事を考えると二人で旅をするのは俺には自殺行為に思えるのだ。まあ、仲間が集まらないのは自業自得な訳ではあるが……。

二つ目の理由は、もっと切実である。旅に出る以上、食料や最低

でもマントの様な簡易的なものであれ野宿対策の寝具などが必要となる。今は春を過ぎてこれから夏に向かっているまっ最中なので寝具は省けるかもしれない。だが、勇者様ご一行が飢えて野垂れ死になされました。なんて、絶対に許容できない話なのだ。しかし、何度も述べたように俺には金はない。だから、これが冒険に出れない理由として最も切実な理由なのであった。

「じゃあ、エリザさんに紹介してもらったらどうです？」

イリアとの会話を放棄してこれからの方針に思いを馳せていると俺の顔を覗き込みながらそんな事をのたまうのだ。こいつはエリザに好くしてもらっているせいか彼女の事を女神かなんかと勘違いしている節がある。

いや、それがもう終わってるから困ってるんだってーの。

こう思うも口には出さない。つてか出せない。同時にこいつは俺に助けられた、と思っけていて俺の事を『勇者さま、勇者さま』と妙に慕ってくれている。実際は見捨てるのに失敗しただけなのだが、こう思われている以上は彼女の頭の中の俺像を壊してしまうのは勇者的にはいけないような事のような気がしているのだ。

「まあ、酒場に戻ったら聞いてみようか」

「はい、勇者さま！」

眩しすぎるイリアの笑顔。そんな顔を見てしまった俺にはこんな曖昧な返事をするのが精一杯なのだ。

この娘はまるで犬だ。これが俺のイリアに対する評であった。

今後の方針もできる事もない俺は彼女とのやり取りの後、しかたないので暇つぶしに図書館へ足を運ぶ。この町に来てからというものの暇つぶしによく利用する場所である。その1歩（距離の単位。1歩≒約50cm）後ろにはイリアが歩いている。こんな風に彼女は俺の後を常に着いてくるのだ。それもいつも上機嫌で。彼女から犬耳とプリプリと振っている尻尾が見えそうなのは俺の勘違いではなからう。

「勇者さま、ご本が読めるなんてすごいですね」

「ん？ お前は文字を読めないのか？」

「はい！」

俺の横に座り尊敬のまなざしを向けるイリア。『読み、書き、ソロバン』を教える学校のような場所は村にだつてあるんだ。むしろ、文字を読めないお前の方にびっくりするぞ。つてか、読み書きができないのにどうやって冒険者登録をしたんだろうか？

それに今、俺が読んでいるのは本ではなくて求人情報誌だ。タイムリミットの長期募集には応募できないので短期　できれば日払いの仕事など無いものかと先ほどから雑誌とにらめっこしているのだ。

そう、俺は今まじめに仕事を探しているのだ。通算で数年間も二ト生活を送ってきた俺がようやく重い腰を上げて職探しなんかを始めたのは思えばこいつのおかげかもしれない。脱二トを試みるようになったつて部分だけはこのいつに感謝した方がよさそうだ。

「勇者さま、勇者さま。これはどんなご本なんですか？」

こんな感じで先ほどから一定間隔で俺に構ってもらおうとする、イリア。その度に「これは本じゃないんだよ」と返している、俺。慕われる、という事は悪い気分はしないものだが流石に何度も続くとうざいに変わってくるつてもんだ。

「……コホンッ。図書館ではお静かに……」

ほら、見る。向かい席の人に注意されたじゃないか。

年頃の男女である処の俺たちのやり取りと言うものは見ようによつては恋人同士の戯れにも見えない事はない。もつとも、俺はイリアに対してそんな感情はまったく抱いていなかったが、要するにこういう場所において最もうざがられる行為の一つなのだ。

こう、注意してきた声の主は紺色のトンガリ帽子にこれまた紺色のだぶたぶのマントを羽織った、いかにも魔法使いでございって感じの眼鏡っ娘。深緑の髪を肩のあたりで三つ編みにしている、といった風貌だった。中々可愛い娘で、ここでよく見かける顔であった。「勇者さまに対して無礼だよ！」

「読書の邪魔して、ごめんな。……ほら、イリアも謝るんだ」

何か気が食わなかったのか、そう食ってかかったイリアの頭を強引に抑えつけて素直に謝罪する俺。

「うー……。ごめんなさい」

「解ってくればそれで構いません。公共の場のマナーは守ってほしいのです。貴方も飼い主ならちゃんと躾けをしてください」

俺とイリアの関係は他人の目からもそう見えるらしい。

「ところで、キミは魔法使いなのかな？」

折角、話すきっかけがあったのだからと、ダメ元で勧誘を試みる事にした。

「ウイズは魔法使いなのです」

「そっかー、冒険者登録はしてないよね？　まだ、パーティーに加わってないよね？」

「何故、その事を知っているのですか？」

「あー、やっぱりそうか。いやね、俺は勇者やってるアークってもんなんだけど、今仲間募集中でさ、登録帳見せて貰ったことあるんだよ。魔法使いの項目にキミの欄がなかった気がしたんだよ。キミみたいに可愛い娘なら登録してあれば見落とすはずないしね」

「え……？　可愛いだなんて……、そんなこと言われたの初めてなのです」

そう言っただけイメージ的には歯がキラリと光るような感じで爽やかに微笑みかける。『可愛い』の部分をやや強調した発言の為、案の定、彼女は俺の言葉に照れていた。そう言えば俺の容姿を説明し忘れていたので今、すると良血の勇者である処の俺は金髪碧眼の甘いマスクを持つイケメンさんである。

中々の好感触のようだ。イリアが何か言いたげな顔で俺の方を見ていたが軽く頭を撫でてやってごまかす。

「ウイズ、キミは自分に自信を持った方がいい」こう言って指で眼鏡の端を摘まんで取ってやる。「うん、やっぱり、すごく可愛いよ」

俺はできるだけ誠実そうな表情を作り彼女の目を見る。すると、

徐々に彼女の目が潤んできて頬を赤く染めるのだ。彼女をジッと見つめる。一分、二分。やがて恥ずかしそうに彼女が目を反らした。

勝った。

そんなウイズの反応を見て俺は心の中でニヤリとした。これでは仲間の勧誘と言うより、ただのナンパかお水のスカウトである。

「どうして、ウイズの名前を知っているのですか？」

「実は前から気になってたんだよ」

大嘘である。もちろん、この娘の一人称がウイズだからなのだがそんな事は言わない。しかし、更に好印象を与えたようだ。俺の言葉を聞くと更に顔を赤くして俯いてしまう。恥ずかしいと言うより嬉しいからと言った感じに。

「どうしたの、ウイズ？」

「ウイズは同世代の殿方とこんなにお話するのが初めてなので混乱しているのです……」

「そっか、取りあえず俺の方、向いてくれるかな？」

「……あっ」

ウイズは素直に俺の言葉に従いこちらを向く。俺は眼鏡を戻してやった。そしてまた見つめ合う……。

「勇者さま、ダメー！」

折角いい雰囲気になった処でイリアが二人を遮るようにテーブルの上にダイブしてバタバタと手足を動かした。何嫉妬してんだよ！

「プツ、ところで何の話でしたっけ？」

ジタバタするイリアを腹に手を回し強引に引っ張り起こしているとウイズが笑いだしてこんな事を言われてしまった。お前が邪魔するからリセットされてしまったではないか！

「ああ、簡単に言くと俺の仲間にならないかって話だよ」

腹立たしさを紛らわす為にイリアの頭を両の拳でぐりぐりやりながら、俺。イリアは「勇者様、許してくださいー」なんて言ってい

だが構う事はない。

「仲間……ですか。ウィズはそういうのも初めてですが、お役に立てますか？」

「実はさ、俺達も初めてなんだよ。だから、そういうの気にしないでいいよ。それに初心者のパーティーに入りたくないって言うのなら気兼ねなく断ってくれていい」

「んー、では、お師匠様のお許しも得ないといけないのでお返事は少し待っていただけるとうれしいのです」

「あー、そうだね。身内の許可は必要だ。俺たちは普段、冒険者の酒場にいるんで決まったら来てもらっていいかな？」

がつついて返すと俺の身分　つまり、仲間のなり手がいないを察せられる恐れがあるので極力、平静にウィズの問いに答える。「はい、わかりました」

半々って処かな。俺は内心こんな事を思いながらも、さわやかに彼女にウイंकをすると何故か不機嫌なイリアを連れてその場を後にした。

「えつと……、また女の子なんだ？」

ウィズの手を取り小躍りして歓迎の意を示した俺をエリザがあきれ顔でこんな事を言う。しかし、彼女もプロだ。時折、俺の方を軽蔑の眼差しを向けながらもウィズに登録用紙を渡し、記入の仕方を説明している。

ハハハ、焼くなよ。

結果は予想以上に早く、夕方には来店しウィズが仲間になると申し出てくれたのだ。

「お師匠様にお話ししたら『お前は書物ばかりで頭でっかちになりがちだから、いい機会だ。勇者様のお役に立ってこい』と言われました」

これで二人目。そろそろ旅の支度を始めた方がいいな。エリザの

冷たい視線を全力で気がつかない振りをしてながら、こんな事を考えてみた。

「アークさんとイリアさん？ ……でしたっけ？ これからよろしくお願いします」

登録が終わったウイズがキャラクターカードを渡してペコリとお辞儀する。

「ああ、こちらこそよろしくな。　　すげえ！」

挨拶を済ませカードに目を通しながら思わず俺は驚きの声を上げた。

カードには名前、職業等の基本情報の他にスキル欄があり、そこに使える魔法なんか書いてあるわけだ。駆け出しの魔法使いというものは普通、単体攻撃の魔法しか使えないものなのだが彼女は違った。

「『爆発』系が使えるのか。こりやすげえ！」

「すごい事なのですか？」

「ああ、期待してるぜ！」

イリアの戦力はまだ未知数だが、ウイズは即戦力間違いなしだ。

こんな娘に出会えるなんてどうやら俺は運がいいらしい。

「勇者様……、ボクの時と反応が違う……」

「だって、お前のスキル欄真っ白じゃん」

別にウイズを特別扱いしたわけではないんだ。解らないものは評価できないってだけの話な訳だ。

「武道家はスキルないけど力とかスピードが凄いですう！」

しかし、それがイリアの気に障ったらしく、口を尖らせて拗ねてしまう。

女って奴はめんどくせえな……。

「イリア、いいか？ 強力な魔法が使える仲間がいるって事はそれだけ戦闘が楽に、そして安全に行えるって事なんだぞ？ それに俺はお前にだって凄く期待しているんだ」

「……本当に？」

「ああ、パーティーの前衛を任せられるのはお前しかないって考えているよ」

「本当ですか！ エヘヘ」

俺の言葉にイリアが目を輝かせて全身で喜びを表すのだ。まあ、言葉の意味は違うのだが『お前しかない』のは事実な訳だからして問題はなからう。

後一人集まるかな……。

こんな事を思いつつも旅立ちに現実感が出てきて俺は少しウンザリするのを感じ始めていた。リーダーたる俺にはパーティーの人選以外にも調停や方針の決定などやる事が多いみたいだ。この時の俺は夕食を摘まみながらそんな事を考えていたのだ。

ニートの俺に務まるものなのだろうか？

第一話 『冒険したら負けかな。とも言っていられなくなってきた』 (後書き)

勇者L V 1 第一話をお送りします。

アークは世界を救わないし、巨悪と戦ったりもしません。

そんな彼の小冒険をお楽しみいただけたら幸いです。

第二話 『無一文では旅立てない。世知辛いものだ』 (前書き)

仲間ができたはいいが、旅費がない。世知辛いものだ。

第二話 『無一文では旅立てない。世知辛いものだ』

旅立ちの章 『無一文では旅立てない。世知辛いものだ』

「じゃあ、今日はこれぐらいで解散かな」

「はい」

「了解しました」

翌日の晩、酒場で再集合をして今後の方針を話し合った。話し合
うつてのは間違いだ。何故なら俺が一方的に決めてしまったからだ。
イリアは全肯定だったしウイズも文句は言わなかったので問題はな
いだろう。

決まった事を箇条書きにしてみた。

- ・ 今日より十日間の内に残り一人が集まらない場合、三人で旅立つ。
- ・ その十日間、路銀稼ぎと戦闘訓練を兼ねて近場のモンスターハン
トをする。

やはり三人では心もとない。かと言って、俺には時間がない。冒
険をした事がないので評定に必要な『経験値』がどれだけ必要なの
か解らないので出発までに余り時間を書ける訳にはいかないのだ。

次に資金問題の解決だ。むしろ、これが一番の問題であった。無
一文では旅立てない。世知辛いものだ。色々と日雇いの仕事を探し
てみたのだが「冒険者なら、その方面で稼げ」と、悉くに断られて
しまったんだ。そこで目を着けたのがモンスター討伐の報奨金だ。
モンスターを倒すと、そのモンスターの強さに比例した報奨金が国
から出るのだ。

朝出発して昼になったら引き返す方針を取る事にした。近場の敵と
言うものはどういう訳だか（俺にとって十分脅威だが）弱い敵が
殆どである。戦闘訓練にもなるし一石二鳥って奴である。

「じゃあ、エリザ。弁当頼むぜ」

「ふふふっ、期待しててね」

機嫌良さそうな声でエリザがウインクをした。俺が重い腰を上げてようやく勇者らしい事を始めた事に気を良くしたのだろう。同い年の癖に母親かつっの。

「どわあああああ！」

俺は今、全力で二匹の犬顔獣人　コボルト　から逃げまくっていた。

「勇者さま！　そんなに動きまわったら戦えませんよ！」

俺を追うコボルト。更にそれを追うイリアが俺に抗議をする。

コボルトつてのは獣人タイプのもンスターの中で一番下位に位置する敵なのだが怖いものは怖いのだ。言葉に従って止まったらえらい事になっちまう！

「そんなに動かれると魔法の照準が合いません」

ウイズまでこんな事を言いたしたが攻撃の対象に選ばれているんだから、やはり従う訳にはいかない。『お前らは無責任だ』と、激しく言いたかった。しかし、声を出した事により呼吸が乱れて走れなくなるのは危険極まりなかった。

どうしてこうなった!?

「じゃあ、がんばってきてね」

城門まで見送りしてくれたエリザが俺たちに手を振っていた。

そんな彼女を背に街道を行く俺達三人。取りあえず今日は街道を歩くことにしたのだ。そして昼となり草むらに座り弁当を食べ終わった頃、奴らが現れたのだ！

「勇者さま、何かが来ます！」

最初にそれに気付いたのはイリアだった。犬っぽい彼女にはどうやら嗅覚と言うか危険感知のような能力が備わっているらしい。

ウー、とイリアが虚空を見つめて唸り声を上げた。その刹那、眼前の空間に切れ目の様なものが現れ、その中から四匹のコボルトが出現する。

そう、この切れ目こそモンスターホールと呼ばれる別次元へ繋がる穴なのだ。この穴はある特定の場所を省きランダムで開く。それを壊すのが俺達の役目だ。

穴を塞ぐ方法は簡単だった。そこから現れたモンスターを全て倒せばいい。この場合、四匹を全て倒せば穴が消えるって訳だ。

三対四……いけるか？

敵を見て素早く戦闘か撤退かの判断をするのも俺の役目だ。この判断をミスれば最悪全滅もありうる重要な判断である。

「勇者さま、やりましょう！」イリアがそう催促した。

そうだな。

コボルトと言えば最弱クラスのモンスターだ。俺達より数が多いとは言っても何とかなるだろう。いや、この程度がどうにもならないのなら、この先やっていく事は出来ない。

「イリア、ウイズ！ 行動方針は打ち合わせた通りに、だ！」

「はい！」

「光よ！」

こう叫び俺はコボルトたちに向けて手の平を向ける。そして一瞬だがそこから激しい光が巻き起こった。

これが俺の使える魔法二つ目『フラッシュ』の魔法だ。強烈な光を浴びせて相手の視力を少しの間、奪うという実にナイスな魔法である。

俺のフラッシュを浴びて目を押さえて苦しむコボルト達。

「はあああああ！」

そこにすかさずイリアが走り込み内の一匹に力任せの正拳突きを飛ばします。ポコッ、という鈍い音がしコボルトAが後ろに吹き飛ばされる。

「『爛れよー！』」

ウイズがコボルトBに『ファイア』の魔法だ。拳ぐらいの大きさの火の玉が着弾すると全身に燃え移り苦悶の声を上げてその場に倒れるコボルト。

どうやら最初のターン（時間の単位：ターン≒約10秒）で二匹仕留められたようだ。まずまずの戦果である。

次のターンにそれは起こった。

視力を取り戻した残りのコボルト達がギロリと俺を睨み『ウオオオオオン』と雄叫びを上げながら、そのどちらも俺に襲いかかって来たのだ。

なぜ、俺に！

『フラッシュ』……追加効果：相手の怒りの矛先を自分に集めるぞ！

ふ・ざ・け・る・な！……そして冒頭に戻る。

状況説明が長くなったが、要するに今、俺は逃げ回っているのだ。もはや後を追うのを止めたイリアとウイズを中心に円を描くように逃げ回る。

傍から見れば面白おかしい図かもしれないが俺はイリアの様に体術は使えない。ウイズの様に攻撃魔法を使えない。剣は使った事が無い。即ち身を守る方法がないのだ。鎧も着てないので攻撃を喰らったら激しく痛い思いをするハメになる。そんなのはゴメンだ。だから逃げ回るしかないのである。つーより、そろそろターゲットを変えろよな……。

考える、俺。

ゼエゼエという呼吸音が俺に逃げ回る事の限界を感じさせていた。選択肢は二つ。一つ目は立ち止って敵の攻撃を避けつつ二人に攻撃の機会を与える。二つ目はこのまま走り回りウイズに何とか魔法を当てさせる。実はもう一つ 力尽きるまで走る っのがあるのだが、それは悲しい結果しか導かないので考慮に値しない。

「ウイズ！ 何とか魔法を当ててくれ！」

一つ目の選択肢はリスクが高すぎるので二つ目を選ぶ。

「無理です。そんなに動かれるとアークさんに当たる恐れがあります」

速攻で却下された。しかし、選択肢一は心情的に選びたくはない。

ん？ 待てよ。俺に当たる、か……。

「ウイズ、俺に向かって『爆発』の魔法を打て！」

「それじゃあ、アークさんが死んじゃいますよ？」

ウイズが困惑顔で俺を見ていた。まあ、普通はそうだな。しかし、限界が近い俺としては急いでもらわないと困る。

「いいから、打て！」

「んー、どうなっても知りませんよ……。

『爆ぜよ！』」

呪文の詠唱が始まった瞬間に残りの力を使って一気に加速しダイブする。俺の想像通り俺の少し前までいた空間にドカンという大きな音が起ると俺はその場に仰向けになって大きく息をした。

「二人ともよくやってくれた」

俺は息が整うと立ち上がる事もしないで二人にねぎらいの言葉を掛けた。

「しかし、大胆な作戦だったのです」

「いや、予定通りだよ」

もちろん俺が追われる事になったのは予想外であったが、その後の話である。俺の言葉に納得がいかなかったようなので説明してやることにした。

「激しく動いている敵を狙えないって事は俺を狙って打てば必然的に俺には当たらないって事だろ。だから俺を狙えと言ったんだ」

「でも、アークさんには当たらなくても敵に当たるとは限りません」

「だから範囲魔法なんだよ。俺の後ろを追って来る奴を根こそぎ巻き込めるだろ？」

「勇者さま、あつたまいいー！」

尊敬の眼差しで俺を見つめるイリア。一応納得してくれたウイズは「リスクが高い作戦なのです」なんてまだ言っていたが俺もその通りだと思った。

うーむ、せめて『防御』ぐらいはできるようにならんとな……。今後の課題を思いつつも戦闘後はうれしはずかしのドロップ確認タイムである。

普通、丸焼きだ、爆発だ、で敵を倒したなら死体がえらくグロイ状態になるものなのではあるがモンスターとなると話は別だ。異世界からの使者たるモンスターは存在の力 通称『HP』 と呼ばれるものでこの世界に存在する事を許される。切ろうが焼こうが血が飛び散る等の残酷描写が起こらない。更に、それを完全に失うと消滅してしまうなんて、実にお子様にも安心してご覧になれる安全設計の世界観なのだ。

そして、消滅した後には稀に宝石やらアイテムやらが残される事がある。これが報奨金以外の収入となるのだ。

「うーん、残念。ドロップなしか。誰も怪我しなかったし、それだけだよとするか」

俺の言葉にそれぞれの言葉で同意を示す二人。

時の流れとは思いのほか早いようで、そんな俺達の初勝利から十日が過ぎた。時には何も起こらなかつたり、時には連続で戦闘に巻き込まれたり。幸いな事に誰一人として大きな怪我をせず三人の息も合い始めた気もする。そんな感じで時間が流れたのだ。

しかし……。

「ふざけんな！」

『冒険の書』を見つめながら思わず俺は大きな声を出してしまった。その俺の声にそれぞれ驚きのリアクションを見せる仲間達。

四人席のテーブルに仲間と共に座ってどっち方面に旅立つか、なんて話をしていた矢先の出来事である。

「アーク、どうしたの？」

エリザが心配そうな顔をしながら俺の前にジュースを置いてくれ

た。俺が真面目にやっている事のご褒美らしく最近の彼女はサービ
スがいいのだ。

「これ見てくれよ……」

そう言っただけ俺は『冒険の書』をテーブルの中央に投げ出した。

エリザが「ふむふむ」なんて言いながらページを捲っていくそれ
を覗きこむように見るイリアとウイズ。

今日、今までの賞賛金をまとめて貰って来た。合計は150G。
旅の消耗品を買うには十分な金額だった。だから、それはいい。

問題は『経験値』欄だ。パーティーの場合、仲間の数値も一括管理
となっている。実は今日まで確認しなかったのだが、そこに書いて
ある数値が酷い有様だったのだ。

最下級のモンスターとはいえ、これまでに三十と四匹ほど倒してき
たのだ。それなのに数値は全員揃って80。レベル2には500程
必要な事を考えると、この仕打ちはあるまいじゃないかと俺は思う
訳だ。このペースだとレベルアップに六十日ぐらい掛かってしまう
ではないか！ だから、俺に残された時間を考えるととても危険な
数値なのである。

「あれ？ モンスター退治じゃあ、そんなに『経験値』稼げないの
知らなかったの？」

「へ？」エリザの問いに思わず間抜けな声を上げてしまう、俺。

「『経験値』って要は『どれだけ人助けに貢献したか』を数値化し
たものでしょ。だから、クエストをこなした方が効率よく稼げるの
よ？」

何だそりゃ、初耳だぜ……。

「試験のテキストに載ってたでしょ？」

啞然とする俺の間抜け顔を見てかエリザがそう加える。俺は特別
枠だからテストの類は一切受けてないんだよ……。

「……今すぐ……」

「え？ 何て言ったの？」

消え入りそうな声の俺。そして、それを聞き取ろうと俺に顔を近

づけるエリザ。

そんな上手い話があるなら乗るしかないじゃないか！

「今すぐ、俺にクエストをくれ！」

思わずエリザの両肩を掴み力を入れて揺さぶりながら大きな声を出してしまった。「ちよつと、痛い」なんて彼女が抗議をしたが構うものか。

「だから、今すぐクエストをくれ！」

「勇者さま！」「アークさん、落ち着いてください」

自覚はないが、この時の俺の目は血走り、鼻は大きく膨らんでいた事だろう。そんな俺をイリアとウイズが宥める。少ししてようやく落ち着いた俺はエリザに「済まない」と謝罪して彼女の肩を放す。「うん、アークがやる気になったのはとても良い事だと思うよ」

少し顔を赤らめながらエリザ。そんな前置きはどうでもいい。早くクエストをくれ。さつきから根拠なく、くれくれ言っている訳だが。冒険者がクエストを受けるのはこう言う場所と相場が決まっている。ううん、知らないけどきつとそう。

「……でもね。ないのよ」

彼女の言葉に思わず目の前が真っ暗になったような気がした。俺は力なく椅子に座ると、やはり力なく背もたれにもたれ掛り焦点の定まらない目で天井を眺めるのだ。そんな俺の様子を見て心配そうな顔で俺を見る仲間達。

「遠くて……よく……聞こえなかった。もう一度……言ってくれ……」

……

「うん、だからね。紹介してあげたいのは山々なんだけど……、決まりがあつてね。紹介できるクエストがないのよ……」

エリザが申し訳なさそうに言葉を続ける。しかし、意気消沈した俺の耳には殆ど届いていなかった。彼女の言葉を要約すると冒険者に紹介できるクエストにはモンスターの目撃証言等からレベルが設定されていて冒険者のレベルがそれに達していない場合、紹介してはいけない決まりになっているようだ。

「昨日までは紹介できそうなあったんだけど、もう別の人が受けちゃったのよね」

「なんたるタイミングか！」

彼女にそんなつもりはないのだろうが今の俺には『ぐずぐずしてるから仕事盗られるのよ』みたいな、追いつ打ちのような一言に益々落ち込んでしまう。

「うん、ここで紹介できるクエストはないけど、別の場所ならあるかもしれないよ」

俺を心配してかエリザは励ますように言葉を締めた。

「勇者さま！ 別の町でクエスト探しましょうよ！」

「イリアさんの言う通りです。元々、旅立つ予定でしたし丁度いい機会なのです」

「……ああ、そうだな……」

俺はどうやら良い仲間を得たようだ。励ましてくれる仲間がいる。それがとても嬉しかったんだ。思わず涙が出る程に……。この頬を伝わる水分は失望によるものではなく、感動によるものだと思いたいもんだ。

「毎度あり！」

翌日、雑貨屋で保存食、ロープと火種マッチのようなものを購入。そしてカバンに詰める。勇者に支給されるカバンは見た目の数十倍の容量があり重さは見た目程度しかないという実に優れたマジックアイテムだ。よって荷物持ちは俺の役目となる。

余談だが『そんな凄い物なら売って路銀にできるのではないか？』などと思われた方もいるかもしれないが、支給された特殊な物品は全て『冒険の書』と連動して売ったのがばれると即資格剥奪となるので、それは出来ないのだ。って、俺は誰に説明しているのだろうか……。

「少ないが、これでお菓子でも買ってこれ」

こう言って俺は二人に余った金を均等に分配した。旅費を抜いた分は山分けにしよう和前々に話し合っていたからだ。一人20Gの分配金。二人は受け取りを拒否して「何かの備えにしてくれ」と、言ってくれたが強引に握らせる。お菓子お腹いっぱいになるまで買ったら無くなるような小銭ではあるが受け取ってくれないと俺が惨めになるってもんだ。

早くひと山当てる仲間に使わせないようにしないと、なんて激しく思った、ある晴れた日の出来事であった。トホホホ……。

エリザとはもう別れは済ませていた。イリアは半泣きで別れを惜しんでいたが今生の別れって訳ではないんだ。また、会う事もあるさ。ってか、『もう会う事がない』『パーティー全滅』なので、また会わないと俺が困る。

門まで少し遠回りをしてから町を出て街道に行く。一年とはいえず住み慣れた場所をしばらく離れるのだと思うと感慨深い気分になってしまった為だ。

黙々と街道を行く三人。

時折、振り返って段々と遠ざかっていくハジメノ町が完全に見えなくなる頃に街道は分かれ道となる。『冒険の書』に付属している世界地図を見て行き先を考える。片方は俺の住んでいたトアルの村に続いている。もう片方はその内に鉦山の村と国境に分岐する道だ。俺は迷わず後者を選ぶ。人が住める場所が決まっているこの世界では町の配置が不自然な事が多い。何故決まっているか、の説明は今回は省こう。とにかく今日、明日は野宿になりそうだ。

リーダー失格だな……。

心の中でこんな事を呟いた。

エリザと別れて寂しいのだろう。いつも元気なイリアが道中ろくにしゃべらずに寂しそうな表情をしていた。こういう時に仲間の気分を盛り上げるのもリーダーの役目だ。だが、同じくセンチになっている俺もどうやったら場が盛り上がるか、なんて考える気にもならなかった。

やがて空が赤く染まり始める。遠くに森が見えてきた。街道がある
とはいえ、日が落ちる前に森を抜けられるとは限らない。夜の森と
言うのはモンスター以外にも野獣に襲われる危険も高い。近くに川
もあるし夜営をするなら視界の良いこちら辺がいいだろう。

「今日はこちら辺で野営をするか」

「そうしましょう」

「じゃあ、俺、薪拾って来るわ。お前達はここで休んでくれ」

俺はウイズの「はい」と言う返事を背中で受けて、その場を離れ
た。

ここに決めた理由はもう一つあった。薪が拾えそうな場所まで距離
があったのだ。そう、少しの間だけでも俺は一人になりたかったん
だ。

やっぱ、二トに勇者は務まんねえな……。

こんな自虐をしながら、ゆっくりと薪を拾ってゆく。十日に渡る
モンスター退治で少しは自信が付いたと思っていた俺だが思わぬ処
で自信を失ってしまった。しかし、不思議と現状から逃げる気には
ならなかった。そもそもその目的は資格の延長だったのだが仲間を得
て、俺の中で別の感情が芽生えていくのを感じていたからだ。

すっかりしないとダメだ。

拾った薪を一度地面に置いて両頬を張って気合いを入れる。勢い
が余って少しヒリヒリする気がしたが、まあ、こんなもんだろう。

そして、仲間の元に戻る。気合いを入れた為か何だかイリアに気
の利いた一言を言えるような気がした。

「あー、悪い、悪い。中々乾いた枝がなくてな。……って」

誰もいなかった。最初、場所を間違えたか？ なんて思ったが俺
の置いていったカバンがあるのでここに間違いがないはずだ。

見捨てられたか？

いや、流石にそれは早すぎる。旅の初日に見限られるようなミス
をした覚えはないし、そもそもこんな俺の仲間になつてくれた奴ら

だ。そこまで薄情なはずがない。なら、敵に襲われた？ いや、それもないはずだ。ここには争った形跡が一切ない。不意を打たれてスリープの魔法なんかで行き成り無力化されない限りは……。そうか、その可能性があるか。突然の事に若干混乱気味の俺は間抜けな思考を働かせる。

そうだ！

俺は急いで『冒険の書』を開き、『ミニマップ』を表示させる。パーティーメンバーの所在地が半径500歩以内であれば表示されるからだ。あつた！ 川の方に二つの青い点。二人はそこにいるみたいだ。

ミニマップを見ながらそこに走る。青い点に動きはない。理由は解らないが二人はそこで何かをしているようだ。とにかく急がねば。やがて川の中に見える二つの肌色の人影。

肌色だと？ 服を着ていないとでも言うのか？
キャツと言う二人の声が聞こえる。

額に冷たい物が流れた。

も、もしかや……。敵に捕まって服を剥がれて……。あんな事とかこんな事とか描写してしまうにはR15にレーティングを上げないといけないような事になっているのでは……。急がなくては二人が危ない。俺一人でどうにか出来るか何て事は今は考えられなかった。

今、助けてやるぞ！

俺は剣を抜き、雄叫びを上げながら足を速める。そして、川に入ると慎重に周囲に視線を動かしながら戦闘態勢を取る。二人は驚愕の表情で俺を見ていた。きっと、恐ろしい目に会っていたのだろう。だが、俺が来た以上はもう大丈夫だ。

「俺が相手だ！」

しかし、何も起こらなかった。緊張が走る。そして、再び周囲に視線を動かす。俺にはイリアの様な嗅覚はない。敵はどこから現れるんだ？

「『出歯亀に制裁を！』」

突如、近くで爆発が起こりその爆風で河原まで吹き飛ばされる俺。クツ……、背中に痛みが走った。敵がどこから攻撃してきたか感知できなかった。しかも、爆発の魔法まで使えるとは……。かつてない強敵に背筋がゾクつとするのを感じた。普段の俺ならここでそのまま倒れている処だったろう。だが、男には倒れてはいけない時がある。それが今だ。俺は立ち上がると再び構え直す。

「……何の相手を……してくれるのでしょうか？」

ウイズは肩をプルプルと振るわせて俺に質問をしてきた。

「いいから、早くこっちに来るんだ！」

確かに二人は全裸だ。その状態で俺の方に来るには躊躇いがあるだろう。しかし、今はそんな事を言っている場合じゃないんだ！

「勇者さまも一緒に水浴びする？」

「ちよ、ちよつと、イリアさん！」

もしか、魅了の魔法でも掛けられているのか？ イリアが俺に手招きをしていた。これは益々危険だ。早く何とかしないと……。

ん？ 水浴びだと？

額から嫌な汗がダラダラと勢いよく流れる。血の気が引いて行くのを感じる。そして、俺は無言でぎこちなく『回れ右』をした。

何て事はない。いや、大問題なのだが……。単純に事実だけを記述すると、俺は二人の水浴びを覗いたつてだけの話だ。俺にそのつもりが無かったとは言え事実は事実である。

「信じてくれなくてもいいから聞いてくれ」

二人が着替えるのを待ち、弁明タイムに突入した。イリアはニコニコしていて、どうやら気にしていないようだ。しかし、問題はウイズだ。当たり前の話なのだが俺に裸を見られて怒っていた。

「これから俺の話は神でも仏でも何でもいい。あらゆるものに誓って本当の話なんだ。……いや、その前に謝る。本当に済まなかった」

俺は二人に深々と頭を下げると言葉を続けた。

「俺は敵に襲われていると思っていたんだよ。水浴びを覗いた訳じゃないんだ。だから二人を助けようと思って…」

「まあ、確かにそんな感じの『お芝居』でしたね」

やはり、ウイズは信じてくれない。いや、イリアまで「そんなお芝居しなくてもボクは一緒に水浴びしてもいいんですよ」なんて嬉しいやら困るやらの返答だ。

二人は確かにかわいいがパーティーメンバーと色恋含めて軋轢を生むような事をする気は俺には断じてないんだ！ 畜生、こんな事ならちゃんと見ておくんだった。

実際の処、俺には『荷物を置いてどこかに行ってしまうなんて不用心だ』とか『どこかに行くなら一言いつてからにしてくれ』とか言いたい事があったのだが、それを言ってしまう彼女の怒りに油を注ぐだけのような気がして言わなかった。

「俺にその意思はなかったとは言え、出歯亀した形になったのは事実だ。さあ、煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

こつ言葉を締めて俺は地面に胡坐を掻いて座る。さあ、殴るなり蹴るなり好きにしてくれ。そして、それで俺を許してくれ。

ふくれっ面のウイズ。そして、二人の近くでオロオロと心配そうにしているイリア。そのまま何も起こらず時間が過ぎていく。

「……解りました。アークさんの言葉を信じましょう。でも、どんな理由にせよ、出歯亀の事実は消えません。これからはこついう事がないようお願いしますよ」

やがて、ウイズはふうつとため息を一つ吐くと俺の謝罪を受け入れてくれた。それに俺は「もちろんさ」と、答え、イリアは「ワイ」なんてピョンピョン跳ねていた。

「でも、本当にびっくりしたんだ」

「何がです？」

「いやな、戻ったら誰もいなかった訳だ。だから、モンスターにでも襲われたのかと思ってさ。……ホントだぜ？」

食事を終えてウイズの怒りが完全に収まったころ合いを見てこん

な話をした。今日の出来事が後々の亀裂になると困る。だから、俺なりにフオローを入れてみる事にしたのだ。

焚火に薪をくべながら、できるだけ穏やかな声でその後の俺の心境を語っていく。

イリアは「そんなに心配してもらって感激です」なんて言ってくれたが、ウィズは言葉を発さずに俺の言葉に耳を傾けていた。どこか嬉しそうな表情で話を聞く彼女。どうやら俺の心配は杞憂となりそうだ。

勇者というものは実に大変な役割だ。もし、時間が巻き戻せるのなら投げ出したいなんて思ってしまう。

だが、同時に悪くない。この時の俺はこんな事を思い始めていたんだ。

翌朝、「後、少し……」なんて寝ぼけているイリアを強引に蹴り起こし、川で水を汲むと旅の再開となる。「さて、分かれ道になったらどっちに行こう？」なんて会話をしながら森へと入る。森と言っても街道が通っているので迷う心配はないし、そもそも迷うほどの大きさでもないようだ。

それが起こったのは森に入ってしまった頃だった。

幾度かに及ぶキーンという金属音。女性のもと思しき声。そして、イリアのウーツという、うなり声。

「行ってみよう」

俺はそうとだけ二人に告げる。そして、走り出す俺たち。

「はああああ！」

声の主は肩を完全に隠すぐらいの長さの朱色の髪をした少女。気合とともに両手で持った剣を振るう。少女は革で作られた胸当てをしていた。恐らくは戦士か俺の同業者だろう。

対するは6歩(約3m)もあるつかという石材でできた巨人　ゴ
ーレム　だ。

少女の剣は見事に敵を捕らえる。しかし、ゴーレムの堅い石肌に

弾かれてしまう。少女の顔には疲労の色が浮かんでいてハアハアと肩で息をしていた。どれくらいかは解らないが結構な時間、死闘を演じているようだ。

「助けはいるか？」

「手を出さないで！」

どう見ても劣勢だった。しかし、俺の言葉をあっさりと拒否をする、少女。

「おい、どうみて負けそうだぞ？」

「あれは『ネームド・モンスター』です」

ウイズの言葉に、なるほど頷く。

確かによく見るとゴーレムの額には普通のと違いますよ、と言わんばかりに淡く光を発する文字が浮かんでいたのだ。一定のエリア内には多少の差はあれども基本的には同じぐらいの強さの敵が出現する。しかし、ごく稀にそのエリアでは考えられないような強さの敵が出現する事があった。それが通称『ネームド・モンスター』だ。

『ネームド・モンスター』はレアなアイテムをドロップする事があるし、倒す事が出来れば冒険者として箔がつく。だから、一人で倒したいって気持ちも解らんでもないが。

「だからって、死んじまったら元も子もないだろ！」

ゴーレムの巨大な拳が少女に向かって振りおろされる。それを間一髪の処で横に跳んで避ける少女。そのまま地面をゴロゴロと転がって距離を取ろうとした。

本人の希望とは言っても、死ぬまでボーッと眺めてました。なんて事になったら寝覚めが悪すぎるってもんだ。ここは乱入させてもらうぜ！

「ウイズ！ あいつの頭に爆発の魔法だ！」

「はい！ 『爆ぜよ！』」

敵と少女との距離は十分にある。巻き込む事はない。俺の指示にウイズは素早く魔法を唱える。ドカンとゴーレムの頭部に爆発が起こり奴の頭の四分の一ぐらいを削る。

二ト時代、頻繁に図書館に通っておいてよかった。図書館にあったモンスター図鑑は俺のお気に入りであった。奴には状態異常や元素系（ファイア等）がまったく効かない代わりに打撃系の攻撃がよく効くのである。

すなわち俺はまったくの戦力外となってしまうのだが、そんな事はいつものも事で我がパーティー的には得意な敵に分類されるのだ。不意を打たれたゴーレムがこちらを向く。この間に体制を立て直してくれよ。

「イリア！」

「はい、勇者さま！」

俺の言葉でイリアが敵に跳びかかっていく。大ぶりのパンチを腹部に放つ。

よし、いい感じだ！ こんな事を思った矢先……。

「いったーい！」

イリアが手を押さえて痛がったのだ。いや、考えてみれば当たり前なのがする。素手で石殴ったんだもん……。これじゃあ倒した頃には彼女の拳が潰れてしまつかもしれない。

考えねば。

今、ゴーレムはイリアを標的にしている。その後ろの方でようやう起き上がった少女。ゴーレムの石の拳が二度、三度とイリアを襲う。攻撃の速度はさほど速くないようで彼女はそれを見事に避けきれている。攻撃する度にゴーレムから破片の様な物がパラリパリと落ちていくのに気がくつ。それが発する地点は頭部。

頭部を注意深く観察してみた。爆発によって砕けた部分から僅かではあったが亀裂が走っていた。ここを狙えば！

「ウイズ、俺の合図で頭部にもう一度、爆発だ！」

「無理です。爆発魔法はしばらく使う事ができません」

「なら、イリア！ 奴の頭を殴れないか？」

「勇者さま、手が届きません！」

ちっ、あの少女を巻き込むリスクを少しでも減らす為に頭を狙わ

せたのが失敗だったか。こんな事なら胴を狙わせればよかつたぜ。と、なると……。

「ウイズ、当てなくていい。奴の足元にアイスの魔法を可能な限り連射！ イリアはその場で回避専念だ」

「はい！ 『凍えよ！』」「勇者さま、解りました！」

ウイズの魔法を受けてゴーレムの足元が徐々に凍り始める。どうやらコイツには碌な知能がないらしく、偶にバランスを崩しながらもイリアを攻撃し続ける。

残る手段は奴を転ばせて頭部を攻撃できるようにするしかない。

その為の第一歩として足元を滑りやすくする。そして、足元に衝撃を与えて転ばすつてのが俺のプランだ。止めはイリアが指す事になる以上、この役は俺がやるしかないか……。

「わたしは何をしたらいい？」

「お前は黙ってる！」

「え？ うん……」

例の少女が俺に指示を求めてきたがそれを一蹴する。俺の頭の中には仲間との連携しか組み立てていない。それに今、タイミングを測っているんだ。邪魔をしないで欲しいものだ。

「今だ！ イリア、奴がこけたら頭を全力で蹴れ！」

ゴーレムがバランスを崩し軽くよろめくのを見て、俺はダッシュを掛けた。そして、奴の手前で足目掛けてスライディングをかました。頼むから転んでくれよ！

ドカンッという大きな音を立てて前のめりに倒れるゴーレム。下敷きにされてなるものと勢いを生かしてゴロゴロと前に転がる俺。「うおおおおお！」

そして、気合いと共に奴の亀裂のある部分に蹴りを入れるイリア。勝った。

体にパラパラと破片の様な物がかかるのを感じて俺は勝利を確信した。ゴーレムって奴は文字のある場所を破壊すると他の部分にダメージが一切なくとも壊れちゃうんだ。そして、文字があつた場所

は頭部。奴は沈黙したはずだ。

俺はゆっくりと起き上がり仲間に向けて親指をグツと立てる。それを見て喜びの声をあげる二人。後は消滅するのを待つ 何だ?!?!

頭部の無いゴーレムが起き上がったのだ。それを見て俺は「散れ!」と言つのがやっとだった。四人で奴を囲む形となる。

「…………どうしてだ?」

「アークさん、ゴーレムの胸に文字が!」

なんてこった。ウイズの言葉に愕然としてしまう。頭部のがフェイクだったのか元々二つあったのかは解らない。とにかく、まだこいつが生きている事だけは事実だ。

「キヤツ!」

奴の攻撃がイリアを掠めた。どうやら攻撃の速度が上がったようだ。

「まだ無理です!」

俺の視線を感じてかウイズが尋ねる前にこっ叫んだ。

畜生、手詰まりか…………。

「必殺技を使う為の時間を稼いで頂戴!」

撤退を視野に入れ始めた頃、少女がこっ叫んだのだ。

「どれくらい? つーか、それでどうにかできるのか?」

「わたしを信じて3ターン耐えて!」

「解った!」

俺としては、その必殺技とやらでこいつを倒せるかどうか半信半疑であったが、それくらいならどうにかなるだろう。それで無理なら素直に逃げよう!

俺の答えを聞くと少女は両目を瞑り黙想を始める。

「ウイズは下がってくれ。イリアは現状維持の回避専念だ」

幸いな事にゴーレムのターゲットは現在イリアにある。ここは奴の注意をこっちに向け続ける為に俺も前に出ざるを得ないだろう…………。

少女がゆつくりと剣を下段に構える。

「おおおおお！」

俺はやけくそ気味に雄叫びを上げると剣を抜き切りかかる。どうやら奴に回避する意思はないようで見事命中させる。嫌な音を立てて宙を舞う刀身。

「おおおおお！」

これは雄叫びではなく剣が折れた事による俺の絶叫である。そう言えば初めて戦闘で剣を使った気がする。貰ってから手入れをした事が無い安物の剣。それを素人が使ったものだからある意味当然の結果かもしれない。

少女がこれまたゆつくりと円を描く感じで上段に構える。その刀身からは淡い光が漏れていた。

「うおおおおお！」

これは運悪く奴のターゲットがこつちを向いて、それを運よく紙一重で避けられた俺の魂の叫びである。

「待たせたわね！ 勇者の一撃『雷撃斬』を受けよ！」

こつ叫び少女が剣を縦真一文字に振るう。まるで雷が落ちたような轟音と共に振り下ろされた必殺の一撃。それが見事にゴーレムの体を両断した。

必殺技による余波で棚引く彼女の朱色の髪、そしてマント。彼女は一度目を閉じるとゆつくりと息を吐きながら剣を鞘に戻した。

そんな彼女の姿を見て俺は美しいと言うか、かっこいいと言うか……。思わず見とれてしまって、凄く勇者っぽいな。なんて場違いな事を考えていた。

「やったー！」

イリアのはしゃぐ声で我に返る。『そうか勝ったのか』なんて思いながら、かっこいい少女とは対照的にその場にへたり込む俺。そして、その束の間にブルツと言うかゾクツと言うか……、とにかく悪寒のようなものに体を支配されるのだ。

「アークさん、やりましたね」

無様な格好をしている俺の肩を軽く叩くウイズの声でその正体に思い当たる。思えば初めて命のやり取りをしたような気がする。勝算のない、下手をしたら俺だけではなく仲間二人の命でさえ失う危険のあった戦い。そんな戦いに勝てたのだ。この脱力感はそれから解放と損害を出さずに勝利することのできた事による安堵感から来たものなのだろう。『後武者震い』とでも名付けてみようか？

「別に助けなんて求めてたわけじゃないけど、一応、礼は言っておくわ」

ようやく虚脱感から解放され俺が立ちあがった頃、少女がこんな事を言った。不機嫌そうな顔。そして、自らの腕を前に組んでいる姿はとても礼を言っているようには見えない。

「強がるなって、俺たちがいなくなったらどう見ても勝てなかったら？」

恩を着せるつもりで助勢に入ったわけではなかったが、彼女のそんな態度に少しムツとしてこんな大人気ない言葉を発してしまうのだ。

「それなのにその態度ってどうよ？」

「何よ！ 助けは要らないって言ったじゃない！」

「……お前な、そういうの逆ギレっていうんだぜ？」

「わたしはお前じゃないわ。オリビエって名前がちゃんとあるの！ それにキレてなんかないわ。わたしは単に事実を述べただけよ！」
オリビエと名乗った少女が興奮して俺に詰め寄ってくる。しまった。

俺は早くも後悔をしますのだ。感情的になった女性との口ゲンカに男は勝てる事なんてできやしない。何故なら相手が絶対に負けを認めないからだ。

「大体、あんたなんか指示出してただけじゃない！ それなのに恩着せがましく……」

ああ、やっぱり駄目だ。俺が躊躇して言葉を止めた瞬間から矢継ぎ早に捲し立てる彼女。

こういう時は相手が勝ち誇って言葉を止めるまで、ただじっと耐え

るしかないんだ。

「勇者さま！」

そんな俺を救ったのはイリアであった。そう呼ばれると俺とオリビエが一斉に彼女の方を向く。確かに彼女も勇者なのだろう。しかし、イリアが呼んだのは当然俺の方だ。それに気がつくとな彼女は顔を赤くして俯いてしまう。

「勇者さま、箱がありますよ」

イリアが先ほどまでゴーレムがいた辺りを指差す。流石、ネームド・モンスターだ。今までにそんな事が起こらなかったんで、すっかりと忘れていたがドロップがあつたようだ。

「ウオホンッ」

それを見た俺はわざとらしい咳払いをする。さらにそれを受けてオリビエは少し考えた後に「山分けでいいわ」なんて言ってくれる。どうやら悪い奴ではないようだ。

「えっと、開けるのはわたしでいいわよね？」

オリビエの言葉に頷くと四人で箱を囲むように立つ。

「ドキドキします」

「ああ、そうだな」

ウイズの言葉に素直に同意を示す俺。箱を開ける瞬間つてのは冒険者にとって一番わくわくする瞬間なのだ。

「じゃあ、開けるわね」

こう言つてオリビエが片膝をつき慎重に箱を開けた。その中に入っていたのは美しい装飾の施された一組の手甲。手甲と言つても腕を覆う部分はなく、どちらかと言つとナックルと言つた方がいいかもしれない。

「ボク、着けてみていいですか？」

俺が無言でオリビエに視線を向けると、彼女はこれまた無言で頷く。それを見てイリアが「わーい」なんて喜びながら手甲をはめてその場でシャドーボクシングを始める。それをやはり無言で見詰める勇者二人。

恐らく考えている事は同じだろう。すなわち『どう処理しよう？』
って事だ。山分けにする以上、売って金を分けるか、さもなければ
片方ずつを分けるって事になる。言葉にしてしまっただけは改めて
馬鹿な考えだと思った。こういうものは大抵セットで効果を発揮す
るものなのだ。

「えっと……」

「うん……」

「あ、そっちからどうぞ……」

先に述べた通りネームド・モンスターのドロップ品は特殊なアイ
テムだ。二度と手に入らないかもしれない物である以上は売ってし
まうのがもつたいたい気がする。やはりオリビエも同じことを考え
ているのだろう。だから、歯切れの悪い言葉を発してしまう。

「勇者さま！ これ凄いですよ！」

イリアがはしやぎながら近くにあつた木に向かって正拳突きを放つ。
ヒュンと言う風を切る音がした。距離があつたので彼女の拳は木に
は届いていない。しかし、その木の幹には何か堅いもので殴つたよ
うな跡が残つたのだ。

思えば今までイリアは素手で敵を殴っていたわけで、これがあれば
彼女の拳を痛める心配が減るような気もする。かと、言つて彼女に
武器を買い与える余裕など我がパーティーにはない。うーむ、どう
にかこれを貰えないもんか……。

「それはソニックナツクルなのです。イリアさん、よかったですね」
その様子を見ていたウイズが一瞬だけ鋭い表情をした後、ニコリ
としながら解説を始めた。これはどうやら武道家用のアイテムらし
い。彼女が『武道家用』って処を強調したのを俺は見逃さなかつた。
これはウイズなりの援護射撃に違いない。

少しの間、シャドーボクシングを楽しんでいたイリアがそれに満
足したのかナツクルを外して箱に戻した。しかし、やはり未練があ
るのだろう。彼女は指をくわえながら名残惜しそうにそれを見つめ
ている。

オリビエは少し複雑そうな表情でその光景を眺めていた。俺はそんなオリビエを無言で見る。それに合わせるかのようにウイズも彼女に視線を向けた。

「む……」

その二つの視線に気がついたのかオリビエの表情が困ったような感じに変わる。

「アークさん、これはイリアさんが使うのが一番だと思うのです」

「いや、山分けて決まったんだから売って山分けにしよう」

ウイズがこんな事を言ったが彼女の目線から別の意図を読み取った俺がささず彼女の言葉を否定した。イリアが涙目で俺の方を見ていたが、安心しろ、たぶんこれで落とせる。

「えっと、オリビエだっけ？ 意地汚い処を見せて済まなかったな。最寄りの町に寄って換金しよう」

こう言って俺は箱を拾い上げると、その蓋を閉めてオリビエに渡す。彼女は箱に手を伸ばしてはいたが実にバツが悪そうな表情だ。

ふふふっ、勝ったな。

「わ、わかったわよ。これはあんた達が使っていていいわ。……でも、勘違いしないでよね。」

所有権の半分はわたしにあるんだから、売ったり無くしたりしたら承知しないわよ！」

オリビエは箱に伸ばした腕を組むとそっぽを向いてこう言った。

それを聞いたイリアが瞳を輝かせながら喜びの声をあげた。

「いいのかい？」

「どうせ、わたしには意味のないものだし、売るのも勿体ないじゃない」

その言葉を聞いた俺は内心ニヤリとしながらも彼女の手を取り、「ありがとう」と礼を述べる。しかし、礼を述べる前に「イタツ」と言う声とともに手を引っ込められてしまった。

そりゃそうだな。俺たちが来るまで、あんなモンスターと一人でやりあってたんだ。怪我の一つもするわな。

「どこが痛むんだ？ 見せてみるよ」

俺がこう言うと彼女は素直に「ここらへん」と、右肩のあたりを指差す。

「ちよっと、何こつち来てんのよ！」

「おいおい、動くなつて」

俺は彼女に密着するように近づくとそこに回復魔法を掛けてやった。

「へー、あんたって回復魔法が使えるんだ」

「まあ、修行不足なんでこんな風に触らないと効果でないんだけどな」

こんなやり取りの中、俺はオリビエからいい匂いがするのを感じていた。改めて見ると彼女は気の強そうな感じではあるが、かなりの美人である。それにグラマーだ。仲間二人は薄っぺらいと言うかとにかく数年後に期待しようって感じなので尚更にそう感じてしまう。そんな彼女から女の子特有のいい匂いがしてきたんだ。俺に胸の鼓動が高鳴るのと同時に邪な心が芽生えてしまったとしても仕方がないってもんだ。

「ちよ、ちよ、ちよっと！ どこ触ってんのよ！」

「ん？ 鎖骨のあたりだが？」

「いや、そうじゃなくて……」

実際にはおっぱいを触っているのだが、俺は極力真面目な表情を作り、いかにも『これは治療行為ですよ』みたいに平静と言っている。

初めて触れるその感触は余りに気持ちよくて、役得とばかりに少し味わったって罰は当たらないはずだ。

「いいかい、オリビエ。臓器へのダメージってのは解りずらいもんなんだ。この際だから全身に魔法掛けといてあげるよ」

「え？ そうなの？」

まったくの大嘘であったが、言葉巧みに地面に彼女を寝かすと、おさわわり もとい、触診を開始した。

「……んっ……あ……んっ……」

俺のいやらしい手の動きに合わせるかのようにオリビエが切なそうな声を上げる。それが俺のスケベ心を加速するのだ。

柔らかくてとてもいい感触だった。そう言えばこんな風に女の子の体に触れるのは初めてだ。こんな事を考えながら彼女の体の感触を楽しんでいく。だから、つついっ俺のポルデージがマキシマムになってしまふのは仕方がないって事で……。つまり、もっと彼女の感触を味わいたいと強く思ってしまったわけで……。

当初、軽く触れるように手のひらを当てているだけだったのが徐々に指でなぞる様に彼女の乳房を遊び徐々に下半身へと向かっていく。

「……もう……いいん……じゃない？」

彼女が潤んだ瞳でこう言ったが、初めて触れる女の子の柔らかい感触にすっかりトリップしてしまった俺にはそんなもんは届かない。それどころか今の俺には別の意味にさえ聞こえてしまう。

ああ、もう行くところまで行っちゃおうか！？

「勇者さま！」

こんな事を思っていた時、イリアが俺にダイブしてこなかったら今頃、俺の指はオリビエのスカートの中を這っていた事だろう。そして、彼女の言葉にハッと我に返る。

やはり、と言うか当然のごとく、イリアとウイズには俺が治療行為などしていない事は解ってしまったのだろう。イリアは手をギュツとして怒った様な顔で俺を見ていたし、ウイズは軽蔑の眼差しを向けていた。

俺は流石にばつが悪くなり咳払いを一つすると「もう終わりだ」なんて出来るだけ平静を装いオリビエに告げた。

「そう……ありがとう」

と、本人には俺の破廉恥な行為がばれていない事が幸いと言うものだった。仲間の冷たい視線を和らげるためにも話題を変えねば……。

「ところでさ、オリビエは一人旅なのか？」

「そうよ」

「ふーん」

「あ、勘違いしないでよ。別に『仲間のなり手がいなかった』とか、そういうのじゃないから」

「いや、別にそんな事、言っていないだろ？」

何だ？ こいつには被害者妄想でもあるのか？ その手の話題は俺的にもタブーなんだから言うはずがないっの。

「そう？　なんかアンタの目が『寂しいやつだな』みたいな感じに見えたけど……。まあ、いいわ。ただね、わたし一人でどこまでやるか試したかったのよ」

「でもよ、試したかったからってあんな無茶はするもんじゃないだろ……」

「うっさいわね。まあ、確かにわたし一人だったら倒せなかったかもね……。一応、感謝しとくわ」

そう言っただけ彼女はフンツと横を向いてしまった。なんだ、可愛いじゃねえか。

「じゃあ、わたし先を急ぐから。また、どこかで会ったらよろしくね」

「ちよつと待ってくれ！」

「な、何よ？」

「今、先を急ぐって言ったよな？」

「……ええ」

「そう言えばオリビエは何処に、いや、何をしようとしているんだ？」

彼女の言葉に引っかかるものを感じて即効で引きとめる。どうやら、これが正解だったらしい。

「うーん、そんな事アンタに言う必要なんかないと思うけど……。まあ、いいわ。王都でクエストを受けてね。それで依頼先に向かっている所だったのよ」

「お前ってレベルいくつだったけ？」

「3だけど？」

こいつだったのか！ こう俺は直感した。冒険者の急ぎの用と言えバクエストと相場が決まっている。俺たちからクエストを奪った奴に出会えるなんてなんて幸運なんだ。いや、彼女が悪いなんて事は全然ない訳だけど……。とにかく、そうと解れば俺の選択肢は一つしかなかった。

「オリビエ、レイドを要求する！」

「え？」

「勇者さま！ レイドって何ですか？」

俺の突然の要求に驚いた顔のオリビエ。イリアがそんな疑問を上げたので説明しておこう。勇者のパーティーは四人までと決まりがある。しかし、何百と敵がいるのが解っているクエストに四人で挑むなんて無謀を通り越して無茶つてもんだ。そこで、そんな時のために複数のパーティーで共同戦線を組みクエストに臨む事が許されていた。それがレイドである。まあ、今回の件は俺たち三人に彼女は一人なのだからパーティーの規定数に納まるわけだが勇者のパーティーに勇者は一人が原則なので少々、複雑な事となってしまう。「うーん、どうしようかな……」

思案顔でこんな事をのたまうオリビエに対して俺は必死だった。

経験値大量ゲットのチャンス逃してなるものか！

「いいかい、オリビエ。今更こんな事を言うのはいやらしい事だが……。先ほどの戦いだって俺たちが駆けつけたから勝てたわけだ。

命の恩人とか、そんな事を言うつもりはないんだ。でも、俺たちが結構使えるつてのは解るよな？」

「なんか、物凄く恩着せがましいわね……。それに低レベルのクエストごときに何でそんなに必死なのよ？」

「それは……」

俺は仲間二人を見やって思わず言い淀んでしまう。俺の冒険の目的は実の所、彼女たちには告げていない。言う機会がなかったからじゃない。『資格をはく奪されそうなんで冒険します』なんて物凄

くかつこ悪いじゃないか！

「ちよつと、こつち来て」

しかし、彼女の疑問はもつともである。そこで素直に理由を話して同情を引こうと俺はオリビエの手を取り、仲間から少し離れると正直にその事を告げる。彼女は呆れた様な顔をしたが理解を示してくれたようだ。

「アークさん、何を話していたのですか？」

「ああ、勇者だけでちよつと交渉をな……」

俺はウイズの疑問を適当にはぐらかすと話を再開した。

「で、レイドの件は受けてくれるかい？」

少しの間、オリビエはジト目で俺の方を見ていたが、やがて溜息を着くところ言ってくれた。

「しょうがないわね。まあ、確かに足手まといにはなりそうもないし、今回だけは一緒にクエストをやりましょ」

その言葉に感極まって彼女の手を取りブンブンと握手をする俺。すぐに「痛いわよ」と、オリビエに振り払われてしまったが、そんな事はどうでもいい。

これで何とかなるかもしれない。この時の俺はそんな期待で一杯だったのだ。

第三話（1）『強力な仲間が加わった。しかし、何故か俺は嬉しいとは思わな

勇者って何だろう？俺はこんな事を考え始めた。

第三話(1) 『強力な仲間が加わった。しかし、何故か俺は嬉しいとは思わな

第三話(1) 『強力な仲間が加わった。しかし、何故か俺は嬉しいとは思わなかつた』

クエストに向かう道中での出来事である。

「しっかし、酷い話だよな……」

「それに関しては少し済まなかつたと思ってるわ」

俺の愚痴に対してオリビエがツンとした顔でそう答えた。

「要請がなかつたって言っても、一緒に戦ったんだぜ？ それなのに経験値なしとか、どんだけクソゲーなんだよ！」

俺の怒りはもつともな物であると自負している。冒険者同士の会話と言えば冒険がらみがやはり多くなる。その中で『 を倒したら経験値がどれくらい入った』なんて話題は最もメジャーなものである。

無論、要請なしの参戦で経験値が増えない事は知っていた。ここいらの敵がくれる経験など、経験上たかが知れているので別に気にもしていなかったのだが、やはりこんな話題をしてしまったのはお約束と、言うやつなんだろう。

即ち、オリビエにゴーレムを倒して得た数値を参考までに聞いてみたのだ。すると彼女はこう答えたのだ。「500入ったわよ」と……。10位だったら気にも留めなかつた訳だが500と言えばレベル2になる数字だ。だから、愚痴るぐらいはしても罰は当たらないはずだ……。

「そりゃ、事情を知ってれば結果は違つたと思うわよ」

「いや、別にオリビエに対して文句言ってるわけじゃないんだ」

「そうかもしれないけど、結局は愚痴の矛先はわたしでしょ？」

「まあな……」

そう思われても仕方なかつたし、俺にその気が無かつたとしても

そうなのかもしれない。オリビエと言う女の子はいい奴なんだが気が強い。彼女は不機嫌そうな顔で俺を睨みつけると俺は歯切れの悪い返事をした。

「勇者さま、ボクは強い敵と戦えただけでうれしいです！」

事情を知らないイリアはあの時の戦いを思い出したのか興奮気味で話に混じってくる。ああ、お前のその純真さがうらやましいよ。

「それに、レアアイテムを貰えたのですから、それで良しとしましよ」

やはり、俺の落胆の理由を知らないウイズもこんな感想だ。

「そうだな、いい物も貰えたし、経験値にはならなかったけど良い経験になったのも間違いないしな」

「はい、素敵なアイテムありがとうございました」

嬉しそうな顔で答えるイリアの頭を俺は撫でてやった。すると、彼女はさらに機嫌のよさそうな顔になる。やはり、こいつは犬だな。こんな事を思っていると。

「ちょっと待ってよ！ あれはあげたんじゃなくて、貸してるだけよ？ 言った通り……」

当然の如く、オリビエがこんな返しをしてくるのだ。しかし、その言葉を聞いたイリアがしょんぼりとした顔を見せるとぼつが悪そうな表情となり言い淀んでしまう。

「……まあ、勝手に売ったりしなれば『返せ』なんてセコイ事言うつもりはないわよ」

「ああ、それは約束するよ」

顔を赤くして、そっぽを向いたオリビエに俺はウインクをしてそう答える。

「……ウウウウ」

そんなやり取りの中、イリアがあげた唸り声に俺とウイズは素早く辺りを見回した。

オリビエは一人、不思議そうな表情と言つかはつきり言ってしまう。イリアの豹変に引いていたのだが事情を知らないので仕方な

い話だった。

そして、俺が剣の柄に手を掛け、それが折れてしまった事を思い出した頃、派手な音と共にモンスターホールからモンスターが出現する。

三体の人型生物。しかし、コボルトではなかった。ごっこつした堅そうな皮膚を持つ小鬼　つまりは。

「ゴブリンか！　『作戦A』で行くぞ」

敵の種類を即断した俺は仲間達に素早く指示を出す。

「ちよつ、『作戦A』って何よ！？」

「『いのちをだいに』！」

やれやれだ。これまた素早く了解の返事をした仲間に対してオリビエがこんな疑問を口にした。それに答えてやる俺。

ちなみに『作戦B』は応戦しつつ場合によっては撤退。『作戦C』は全力で撤退である。我がパーティーに『ガンガンいこうぜ』の様なアグレッシブな命令はないのだ。

「よく解らないから、わたしは勝手にやらせてもらうわ！」

オリビエがこう宣言し、それが合図となりイリアとウイズも攻撃を始めた。

そして、数ターン後。

「やりました、勇者さま！」

はしやぎ声を上げながらオリビエにハイタッチをしたイリアに何となく微妙な感情が沸き起こる俺。

「…………あれ？」

戦いは実にあっけないものであった。確かに仲間が一人増えたと言ふ事実はあった。しかし、ゴブリンはコボルトより強い。なのに、こつもあっけなく勝てるとは…………。

オリビエが強いのだろうか？

それとも四人になった事がこれ程までの違いを作るものなのだろうか？　俺は何もしていないと言ふのに！

何故だろう？ この胸のもやもやは……。

俺の中で芽生え始めた、この違和感の正体は何だ？

「ところでオリビエさん、ウィズ達はどこに向かっているのでしょうか？」

「え？ 言っただけじゃなかったっけ？」

ウィズの当然と言えばあまりに当然な問い。そう言えばそうだが、クエストにありつく事に必死で肝心の内容について何も聞いてなかったな。できるだけ簡単な奴を希望したいところだ。

「ここから……そうね、三日ぐらいかしら？ この国の北端に『コマル』って町があるの知ってる？」

「えーと、ここか。……山間の町って感じだな。んー、これだと国境の沿いに行っただ方がいいのか？」

「そうね」

彼女の問いに『冒険の書』付属のワールドマップで場所を確認しながら返事をする。何故だろう？ イリアが地名を聞いた途端にそわそわし出したのは？

「どうした、イリア？ シッコか？」

「そう言うデリカシーのない聞き方しちゃだめですよ」

イテツ。オリビエに剣の柄で殴られ、ウィズには冷たい視線で見られた。確かに言われた通りだが、イリア相手だとそれぐらいしか思いつかなかっただよ！

そんなやり取りの中、イリアはやっぱりそわそわしていて、何か言い難そうに少し顔を赤くしながら上目使いで俺の方を見てくる。やっぱり、シッコじゃないのか？

「違います、勇者さま。……あの……その……」

シッコじゃないとすれば……ああ、俺がいると話さぶら内容か、すると女の子の日とかな？ 確かにそれならモジモジしてしまうのはしょうがないってもんだ。なんて、俺は勝手に決め付けて一人ウンウンと頷くとウィズに耳打ちをした。

「どうやら俺がいると話し難い内容のようだ。ウィズ、俺はちと離

れているんで話を聞いてやってくれよ。」

「アークさん、解りました」

「いえ、勇者さま、違つんです。実は……」

俺がその場を離れようとする、ようやくイリアは話したのだ。

「そんな事はもっと早く言ってくれよ」

「そうです。水臭いのです」

「オリビエ、すまんが寄り道になってもいいよな？」

「まあ、事情が事情なだけにしょうがないわね」

以上はイリアの話を聞いての各人の反応である。

「ですが、冒険中に自分勝手な事を言い出すのが申し訳なくって…

…」

それに対して彼女は心底申し訳なさそうにシユンとしながらこう答えた。

イリアの話つてのは何て事はない。いや、こんな言い方をしてみうと彼女に悪いか。要約すると『コマル』の町に向かう途中に彼女の故郷があり、こっちに向かうついでに両親の墓参りがしたい、って内容だ。俺の想像はすべて壮大な勘違いだった訳だな。

それにしてもウイズではないが水臭い。確かに現在、仕事に向かう途中でも別パーティーと行動を共にしているとは言え俺が断るとでも思つたのだろうか？

「いいかい、イリア？ いや、ウイズもそうだ。今回の件で俺にはよくわかつた事がある。確かに俺たちはまだ知り合つてから日が浅い。しかし、一緒に冒険する仲間だつてのは間違いない事なんだ。だから、これからはこの手の遠慮は一切なしだ。解つたか？」

俺の言葉に二人はそれぞれの言葉で肯定の返事をする。

「ふーん、あんた勇者っぽい所あるじゃない」

「茶化すなよ」

そう言つて悪戯っぽい表情をしたオリビエに思わず俺は照れてしまった。いや、この時は照れたと思つていた。

「じゃあ、道中で花でも摘んでいこうぜ」

「はい、勇者さま！」

そう言ってニコリと笑ったイリアの顔はとても眩しかった。

「勇者さま、ここすり剥いちやっただんでお願いします」

「……ああ」

まるで真夏の太陽の様なニコニコ顔のイリア。梅雨の雨雲の様などんよりとした俺。

「もうそろそろイリアちゃんの故郷が見えてくるんじゃない？」

「……そうだな」

あれから二日が経った。

その間は妙にエンカウト率が高く幾度もの戦闘が行われたのだ。しかし、いや、やはりそれら全てに大した苦労もなく勝利する俺たち。

今だって戦闘が終わったばかりだ。

俺たちのパーティーは実に優秀だった。攻守のバランスのよいオリビエ。素早く力強いイリア。強力な魔法を駆使するウイズ。そして、何もしない俺。

強力な仲間が加わったのに、何故か俺は嬉しいとは思わなかった。本来望んだはずの状況のはずなのに、だと言うのに何なのだ！

俺のこの微妙というか、沈んだというか、はつきり言ってしまうと、とにかく面白くないのだ。

「さっきのアシストは助かったわ、ウイズちゃん」

「ふふふっ、そう言ってもらえると嬉しいのです」

ここ数日で三人の女の子は打ち解けたようだった。別に俺がハブられるなんて事はなかったのだが彼女たちが仲良くなる度に何となく疎外感を覚えていく俺。

いや、ただの自意識過剰ってのは解っているし、自分から勝手に外れていつているのも理解している。だが、イリアの「勇者さま」

つて奴も段々とオリビエに向けて言っているように聞こえてくるんだ……。

「見えてきたようね」

「やったー！」

オリビエの言葉にイリアの表情がパアツと明るくなる。

そのイリアの表情を見てようやく理解した。

俺はオリビエに嫉妬しているんだ……。

第三話（1） 『強力な仲間が加わった。しかし、何故か俺は嬉しいとは思わな

前回で原稿のストックが切れてしまったので、できた分だけアップ。
今回はちょっと暗めのお話です。

第三話(2) 『強力な仲間が加わった。しかし、何故か俺は嬉しいとは思わな

俺は弱い。その事を思い知らされた。

第三話(2) 『強力な仲間が加わった。しかし、何故か俺は嬉しいとは思わな

第三話(2)

「それにしても酷い有様ね」

「勇者さま、大丈夫ですか？」

「盛大に転んじまってな」

仲間の心配顔をよそに俺は素っ気なく返事をするそっぽを向いた。バレバレの嘘だが、追及をしてこない仲間の優しさが今は苦しかった。

ああ、確かに今の俺は酷い有様だった。服は埃まみれ。顔は痣だらけ。

本当は怪我が治るまで戻りたくなかったのだ。しかし、俺の実力だとそれには時間が掛かる。仕方がないので顔の腫れが引くぐらいまで回復させて皆と合流する事にしたのだ。

だけど、俺が先走ってしまったのは仕方がない事だった。

「父上、母上、お墓参りに来ました」

そう言つて墓を綺麗に掃除し花を供えて感慨深そうに黙祷したイリアを俺は心此処にあらず、と言う感じで眺めていた。

イリアの故郷である『プトカの村』に到着すると、狭い村だ。当然の如くイリアの知り合いに話しかけられたりしたわけだ。

その中にある悪い噂を俺は聞き逃さなかった。

悪い噂　つまり、イリアの家についてだ。彼女が村を去ってからガラの悪い連中が屯するようになり、彼女の家に誰も近づけないようになったという。

この話を聞いて俺は確信をした。イリアは父親の借金のカタに家を取られたと言った。だが、彼女は騙されただけなのだと。

俺たちの住む世界『エニウエア』では安全に人間が住める場所が

限られている。『絶対結界』と呼ばれるものが各地に点在していて、その結界の効果範囲内はモンスターホールが出現しないし、上位クラスのモンスターでもない限りは侵入する事ができないのだ。

結界の場所に規則性はなく、例えば険しい雪山の頂上なんかに結界がある場合もあり、また効果範囲も場所によって違う。即ち結界の効果範囲によって町の規模が決まるのである。つまり、この世界では人間が安全に住める土地というものに物凄い価値があるのだ。

だから、俺は取り返してやろうと思ったんだ。……俺一人で。

我ながら馬鹿な事をしたもんだ、と思う。しかし、その時の俺は彼女への同情や義憤で動いていたわけではなかった。単に仲間達にいい所を見せたかっただけだったんだ……。

「イリアも、おやじさんに報告とか色々あるだろうから、ここは一旦解散して夕方に酒場で集合って事にしようか」

イリアが墓前で熱心に 恐らくこれまでの事を両親に報告しているのだろう 祈りを捧げている中、俺は素知らぬ顔でこんな事を言ったんだ。ウイズもオリビエも俺の言葉に何ら疑問を持たず肯定の返事をした。そして、俺は心の中でニヤリとしつつ一人でイリアの家へ向かった。

なあに、町の荒くれ共って言ったって荒事はこっちが専門だ。たとえ一人だったとしても負けるはずはない。

俺はこんな根拠のない自信を胸にイリアの（元）家に向かった。小さな村だったし、場所は何気なく彼女から聞き出していたので、俺の歩みに迷いはなかった。

そこは実に簡素な建物であった。小さな小屋とそれに併設された屋根と柱しかないテラスの様な部分。恐らく道場の部分なのだろう。そして、その道場に屯している三人の実に解りやすい格好をしたチンピラ達。

そいつらを見て『やっぱり止めとくか？』なんてちょっとビビる。それでは意味がないと、目を瞑り大きく深呼吸して覚悟を決める俺。

「やあ、ちよつと尋ねたいんだが、ここにイリアって子が住んでるハズなんだ。あんたら知らないか？」

「あんだ？ テメエは？」

俺が尋ねるとこんな感じで一斉にガンを飛ばしてくるチンピラーズ。

「いやあね、俺はこの家の人間と昔から付き合いのある者でね。久しぶりにここに寄ったついでに挨拶しておこうと思ってね」

内心ビビリながらも平静を保ちつつ俺。

「あんたらオヤジさんの弟子なんだろ？ オヤジさんは今日は不在なのかい？」

「はあ？ 何言ってるんだ、コイツ？ やっちまうか？」

うわ、ちよつと待てよ。キレるの早過ぎんだろ！ 俺にも心の準備ってもんが……。

俺とのコミニケーションを拒絶するかの如く、向かって来るチンピラーズ。俺ピンチ！

ここは得意のハツタリでどうにかせねば……。

「俺は『勇者』アークってもんだ。今日はさ、このイリアを仲間にスカウトに来たんだが……。オヤジさんが居ないとなると困ったね……。二人が戻って来るまでここで待たせて貰っていいかい？」

『勇者』って部分を強調して俺はニヒルに笑う。

案の定、その言葉に反応して奴らの動きが止まった。こう言った輩はいつもそうだ。勇者ってのは普通強い。少なくとも戦いの素人ではない。この手の輩は『弱い相手にはとことん強く、強い相手にはとことん弱い』って相場で決まっている。

相手の返事を待たず俺は出来るだけふてぶてしい体で道場内の先ほどまで奴らが座っていた椅子に腰かける。

しかし、困ったぞ。この後どうやって家を取り戻す算段をするか……。

「勇者アークさんでしたっけ？ ここは二か月前から空き家なんですよ」

俺が困っていると、小屋のドアがギイッと音を立てて開き中から、やたらとニコやかでそれでいて全く笑っていない　恐らくはこいつらのボスの存在なのだろう　やたらと身綺麗な格好をした男が出てきた。

「ほう、そりや知らなかった。彼らは引越してもしたのかい？」

「そんな所ですね。この家主様は我々に多額の借金がありましてね。返せるアテがどうしても出来ないって話なので、我々としても大変心苦しいのですがこの敷地を借金のカタに頂いた次第です」

「なるほど、二人に会うのを楽しみにしてただけに実に残念だ」

「ここまではイリアに聞いた通りの展開だな。しかし、何かに引かかる。どうして、こいつらはここを売りもせず屯てるんだらう？」

「ところで、二人はどこに引越したか解るかい？」

「ええ、北の方に行くと言われてましたね。と、言う事でアークさん、お二人はもうここにはおられない事を解っていただけましたか？」

「ああ」

「それはよかった。それでは我々も仕事がありますのでお引き取り願えますか？」

「どうやら、こいつは俺がイリアの親父さんが亡くなられている事を知っている事実を知らないらしい。」

説明したとおり人間の住める土地は価値が高い。二か月前に手に入れた土地がまだ売れていないなんて考えられない事だ。土地の高騰を狙っている可能性も無いわけではないが、まさかここに住み着くつもりでもあるまい。この事実が突破口になるかもしれない。

「ところでさ、こいつてもう売れたの？」

「いえ、現在、高く買って下さるお客さまを探している最中でした」「そっか、じゃあ俺に売ってくれるかい？」

「ふふふ、御冗談を。アークさんが買えるようになる頃には流石に売れていますよ」

まあ、そういう反応だろうな。俺の格好からみて金持ちには見えないわな。

買い手の付いていない土地。そして、いまだに取り壊されてないイリアの家。どうやら売れない理由があると見た。

「それに、おかしいな……。オヤジさんに借金があるなんて話聞いたことないんだよな……。つーか、あんだけ憤ましく生きていたオヤジさんに借金なんてあるはずがない」

「ほう、我々をお疑いで？」

「いや、そう言う訳じゃないんだけど……。借金の証文とか見せて貰う訳にいかないか？ それを見せてくれれば心おきなく帰れるってもんだ」

俺の言葉に『てめえ、なめんじゃねえぞ』と、チンピラーズが口々に罵ってきたが、それを片手で制すニヤけ男。

「お見せしたいのは山々なのですがね。我々の分は本社に保管されていてここにはありませんし、家主様の分は土地の譲渡の際にお渡ししてしまったので、お見せする事ができないんですよ」

「そっか、オヤジさんが証文を持ってるんだ？」

「その通りです」

よし、馬脚を現した。これで俺の勝利は確定だ。

「邪魔したね。でも、おかしな話だ。オヤジさんの墓はこの町にあるんだぜ？ 死人に渡したなんてでっち上げもいい所だ」

こう言いきって俺はニヤリとした。それとほぼ同時にニヤけ男が怒りの表情を見せチンピラーズに俺を襲う様に怒鳴りつける。

後はこいつらをとっちめてここから追い出すだけだ。

俺はスラリと剣を抜き『フッ、安心しろ峰打ちだ』なんてカッコつけて勝利する。そして、イリアの家を取り戻し仲間達の尊敬を集める。

……そのはずだった。

実際は俺の剣は折れていたし、仮に折れていなくても結果は変わらなかっただろう。オリビエなら、イリアなら、ウイズなら……。

そんな状況でもこの程度の奴らには負けなかつただろう。しかし、俺は弱い。功名心に狂っていた俺はその事を忘れていた。

多少、小賢しく舌が回るだけで、戦いは素人同然だったんだ、俺は……。

ものの数分で袋だたきにされた俺は不様にもその場から逃げだした。

第三話(2) 『強力な仲間が加わった。しかし、何故か俺は嬉しいとは思わなか

く登場人物紹介』

アーク……脱二トを余儀なくされた『勇者』である。

イリア……力はすごいが頭は弱い『武道家』。最近いいものを手に入れた。

ウイズ……燃費は悪いが強力な魔法が使える『魔術師』。影が薄い。
エリザ……酒場の娘。お節介焼きではあるがアークに惚れてるなんて事はこれっぽっちもない。

オリビエ……勇者らしい『勇者』。アークに勝手にライバル視されている。

設定上エリザは一緒に旅に出れないので出てきたエリザの分身。

よってこの二人はキャラが被っている。

名前の由来は縦読み

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8070/>

勇者Lv 1

2011年5月17日06時48分発行